

山王遺跡13

— 第16次調査報告 —

2023

福岡市教育委員会

山王遺跡 13

— 第16次調査報告 —



遺跡略号 SNN-16
調査番号 2016

2023

福岡市教育委員会



1. 1区全景（南西から）



2. 2区全景（北西から）



1. SE119 挖削中（北から）



2. SE119 断ち割り（北から）



3. SE119 出土 銅鏡と X 線写真



1. SD007 遺物出土状況（2区西から）



2. SE113 挖削中（北西から）



3. SE113 断ち割り（北西から）

序

福岡市は玄界灘に面し、古来より大陸・半島との交流が絶え間なく行われてきました。なかでも博多区山王周辺には、弥生時代から中世にかけての遺跡が数多く存在します。近年の著しい都市化により失われるこれらの文化財を後世に伝えることは、本市の重要な責務です。

本書は、共同住宅建設工事に伴う山王遺跡第16次発掘調査について報告するものです。この調査では堅穴住居や土坑、溝、井戸、柱穴等を検出し、弥生時代から平安時代に至るまでの土器、陶磁器、石器および金属器等が出土しました。これらは地域の歴史の解明のためにも重要な資料となるものです。今後、本書が文化財保護に対する理解と認識を深める一助になるとともに、学術研究の資料としてもご活用いただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、土地所有者様をはじめとする関係者の方々には発掘調査から本書の刊行に至るまでご理解とご協力を賜りました。心から感謝申し上げます。

令和5年3月23日

福岡市教育委員会
教育長 石橋 正信

例　言

1. 本書は令和2（2020）年7月27日から10月14日に福岡市教育委員会が行った、博多区山王2丁目32-1所在の山王遺跡第16次調査の発掘調査報告書である。
2. 本書に用いた座標系は世界測地系であり、本書の図に用いた方位は座標北である。
3. 検出遺構には3桁の連番号を付し、遺構の性格を示す記号として、SC（住居）、SD（溝）、SE（井戸）、SK（土坑）、SP（柱穴・ピット）を用いた。
4. 本書に掲載した遺構実測図の作成は今井隆博が行った。
5. 本書に掲載した遺物実測図の作成は大庭友子・山本麻里子・野口聰子・今井が行った。
6. 本書に掲載した挿図の製図は野口・今井が行った。
7. 本書に掲載した遺構・遺物の写真撮影は今井が行った。
8. 本書に関わる遺物・記録等の全資料は、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵・保管される予定である。
9. 本書の執筆・編集は今井が行った。また、附編として九州大学 田尻義了氏からSE119出土の小形彷製鏡についての報告を賜った。

遺跡名	山王遺跡	調査次數	第16次	遺跡略号	SNN-16
調査番号	2016	分布地図幅名	37 東光寺	遺跡登録番号	2379
申請地面積	585m ²	調査対象面積	222.22m ²	調査面積	214m ²
調査地	福岡市博多区山王2丁目32-1			事前審査番号	2019-2-982
調査期間	令和2（2020）年7月27日～令和2（2020）年10月14日				

本文目次

I はじめに	1
1. 調査に至る経緯	1
2. 調査の組織	1
II 遺跡の立地と環境	2
III 調査の記録	7
1. 調査の概要	7
2. 遺構と遺物	7
①住居 (SC)	7
②溝 (SD)	12
③井戸 (SE)	16
④土坑 (SK)	25
⑤その他の出土遺物	27
IV おわりに	33
附編 山王遺跡第16次調査出土の小形仿製鏡について (九州大学 田尻義了)	34

挿図目次

第1図 山王遺跡と周辺遺跡 (S = 1/25000)	3
第2図 山王遺跡と周辺遺跡の調査地点位置図 (S = 1/10000)	4
第3図 調査区位置図 (S = 1/1000)	5
第4図 調査区位置図 (S = 1/500)	6
第5図 調査区位置図 (S = 1/4000 昭和初期)	6
第6図 1区東壁土層図 (S = 1/60)	7
第7図 調査区全体図 (S = 1/100)	8
第8図 SC079・115・116 実測図 (S = 1/40)	9
第9図 SC079・115・116 出土遺物実測図 (S = 1/3)	11
第10図 SD007 実測図 (S = 1/60)	12
第11図 SD007 出土遺物実測図 (S = 1/3)	13
第12図 SD008・078・114 実測図 (S = 1/40)	15
第13図 SD008・078・114 出土遺物実測図 (S = 1/3)	16
第14図 SE004・084・113・119 実測図 (S = 1/40)	17
第15図 SE004 出土遺物実測図 (S = 1/3)	18
第16図 SE084 出土遺物実測図 (S = 1/2・1/3)	19
第17図 SE113 出土遺物実測図① (S = 1/3)	21
第18図 SE113 出土遺物実測図② (S = 1/3)	22
第19図 SE119 出土遺物実測図 (S = 1/3)	24

第20図	SE119 出土銅鏡実測図 (S = 1/1)	24
第21図	SK005・006・111・118・142 実測図 (S = 1/40)	25
第22図	SK005・006・111・118 出土遺物実測図 (S = 1/3)	26
第23図	SK142 出土遺物実測図 (S = 1/3)	28
第24図	その他の出土遺物実測図① (S = 1/2・1/3)	29
第25図	その他の出土遺物実測図② (S = 1/2・1/3)	31
第26図	その他の出土遺物実測図③ (S = 1/2・1/3)	32
第27図	小野崎遺跡出土鏡 (高見淳編 2006 より)	34

図版目次

- 卷頭図版 1 1. 1区全景（南西から）
 2. 2区全景（北西から）
- 卷頭図版 2 1. SE119 挖削中（北から）
 2. SE119 断ち割り（北から）
 3. SE119 出土 銅鏡と X 線写真
- 卷頭図版 3 1. SD007 遺物出土状況（2区西から）
 2. SE113 挖削中（北西から）
 3. SE113 断ち割り（北西から）
- 図版 1 1. 調査前状況（北から） 2. 1区東壁土層（南西から）
 3. SC079 中央部遺物出土状況（西から）
- 図版 2 1. SC079 完掘状況（西から） 2. SC115 床面検出状況（西から）
 3. SC116 遺物出土状況（西から）
- 図版 3 1. SC116 完掘状況（西から） 2. SD007 土層（1区西から）
 3. SD007 完掘状況（2区西から）
- 図版 4 1. SD008（南から） 2. SD078（西から）
 3. SD114 土層（東から）
- 図版 5 1. SD114（南西から） 2. SE004 挖削中（西から）
 3. SE004 断ち割り（西から）
- 図版 6 1. SE084 挖削中（北西から） 2. SE084 断ち割り（北西から）
 3. SK005 土層（東から）
- 図版 7 1. SK005 完掘状況（東から） 2. SK006 土層（北西から）
 3. SK111 土層（東から）
- 図版 8 1. SK111 完掘状況（東から） 2. SK142 遺物出土状況（南西から）
 3. 調査終了後状況（東から）

I はじめに

1. 調査に至る経緯

福岡市教育委員会（経済観光文化局埋蔵文化財課）は、同市博多区山王2-32-1における共同住宅建設工事に伴い提出された「埋蔵文化財の有無について（照会）」を、令和元（2019）年12月13日付で受理した（事前審査番号2019-2-982）。埋蔵文化財課は、申請地が周知の埋蔵文化財包蔵地である山王遺跡の範囲にあることから、令和2（2020）年1月20日に確認調査を実施し、地表下0.55mで埋蔵文化財を確認した。この結果をうけて、埋蔵文化財課は、「埋蔵文化財の有無について（照会）」を提出した申請者に対し、埋蔵文化財が存在することを回答し、その取り扱いについて協議を行った。協議の結果、事業対象面積585m²のうち、予定されている共同住宅建設工事による埋蔵文化財への影響が回避できない222.22m²について、記録保存のための発掘調査を実施することで合意した。

その後、令和2年4月27日付で事業主である個人を委託者、福岡市長を受託者として埋蔵文化財調査業務委託契約を締結し、7月27日から発掘調査を開始した。資料整理は令和3年度を行い、報告書作成は令和4年度に行った。

2. 調査の組織

調査委託：個人

調査主体：福岡市教育委員会

（発掘調査：令和2年度、整理報告：令和3・4年度）

調査総括：文化財活用部埋蔵文化財課長	菅波正人
同課調査第1係長	吉武 学（令和2年度）
調査庶務：文化財活用課管理調整係	本田浩二郎（令和3・4年度）
事前審査：埋蔵文化財課事前審査係長	松原加奈枝（令和2年度）
同課事前審査係主任文化財主事	井手瑞江（令和3年度）
同課事前審査係文化財主事	内藤 愛（令和3・4年度）
調査担当：埋蔵文化財課調査第1係文化財主事	本田浩二郎（令和2年度）
	田上勇一郎（令和3・4年度）
	田上勇一郎（令和2年度）
	森本幹彦（令和3・4年度）
	山本晃平（令和2・3年度）
	三浦悠葵（令和4年度）
	今井隆博

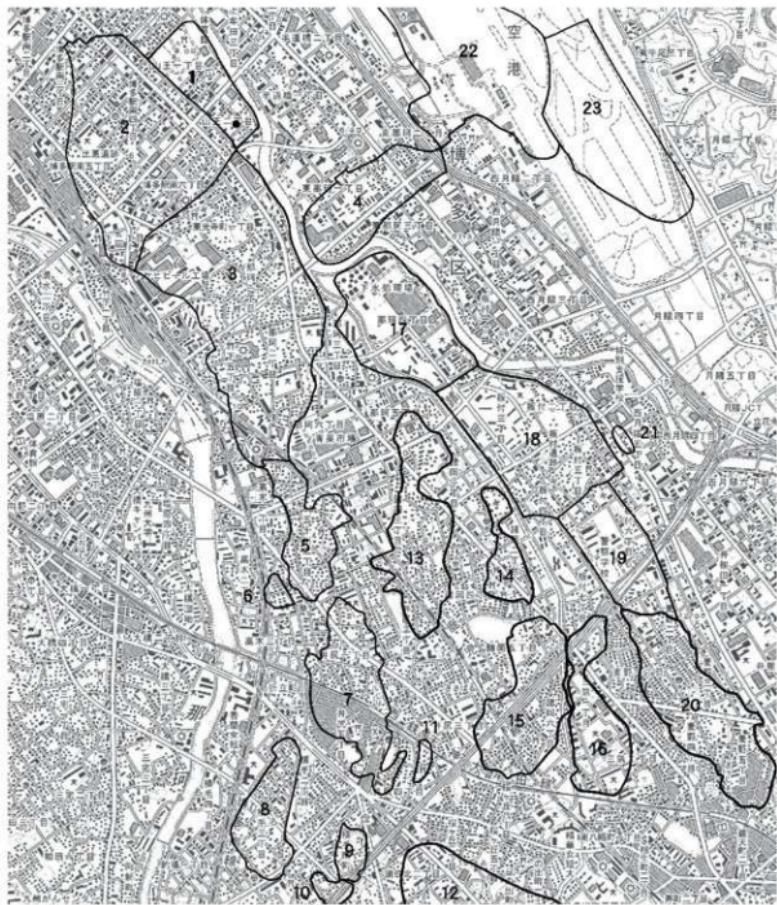
II 遺跡の立地と環境

福岡平野は、西は背振山系に属する油山から北に派生する丘陵によって早良平野と画され、東は三郡山地から北に延びる月隈丘陵によって柏屋平野との境界をなしている。この平野は主に背振山系から発した那珂川と、牛頭・四王寺山地から発した御笠川とによって形成された沖積平野で、河川の開析によって段丘が南北に連なっている。春日市須玖から福岡市博多区博多駅南まで続くこの段丘上には、弥生時代以降、連続と集落が営まれてきたことがわかっている。山王遺跡は、このような台丘群の北東端、御笠川の西岸に位置する複合遺跡である。

山王遺跡の周辺には、弥生時代から中世に至るまで、福岡平野を代表する遺跡が多く分布している。まず、山王遺跡と同一の段丘上に展開する、西側の比恵遺跡群は、すぐ南側の那珂遺跡群とともに、対外交流の窓口として機能した大規模集落遺跡として著名である。弥生時代中期後半、弥生時代終末期から古墳時代前期、7世紀頃の各時代に盛期を迎える。中国・朝鮮半島系の遺物が豊富に出土するだけでなく、「日本書紀」に記述のある「那津官家」と推定される倉庫群も複数地点で検出されている。那珂遺跡群の南側には、鞍部を介して五十川遺跡が展開する台地に連なっており、五十川遺跡以南にも、井戸B遺跡や、弥生時代のクニである奴国を中心地と評価されている須玖・岡本遺跡などが続く。一方、山王遺跡の南東側には、御笠川・諸岡川による沖積低地が広がっており、弥生時代中期から古墳時代にかけての水田跡が見つかっている(東那珂遺跡や那珂君体遺跡)。また、山王遺跡のさらに北側の低湿地を挟んだ海浜砂丘上には、中世の貿易都市として著名な博多遺跡群が立地している。

山王遺跡は、令和4(2022)年12月末現在に、遺跡の南側を中心に19次の発掘調査が行われてきた。その結果、主に、弥生時代前期から古墳時代初頭、古墳時代後期から古代、平安時代末から鎌倉時代にかけての集落跡が確認されている。弥生時代前期の造構としては、6次調査で木棺墓・甕棺墓が検出されたほか、7次・10次調査などで貯蔵穴が見つかっている。弥生時代中期から後期、古墳時代初頭にかけては堅穴住居や井戸、土坑などが増え、集落としての拡大がみられる。とくに、12次調査では、弥生時代中期前半の土器を伴って「ペラベラ銅戈」とも俗称される銅戈鋌型が出土しており、国産化の当初から山王遺跡で青銅器生産が行われたことを示すものとして理解されている。また、11次調査では、弥生時代後期の土坑から、蛇紋岩製の勾玉とともに類例の少ない鉛ガラス小玉が、10次調査では、弥生時代終末期の堅穴住居から「ムティサラ」のガラス管玉が出土している。その後、古墳時代中期には一度人々の生活の痕跡がなくなるものの、古墳時代後期から古代にかけては4次・5次・8次・11次調査などで住居跡や土坑が検出されており、集落が再び営まれるようになることがわかっている。この時期には、10次調査で大型掘立柱建物が、6次調査では正方位を志向する可能性のある溝等も検出されており、注目される。このように、弥生時代から古代にかけての山王遺跡は、隣接する比恵遺跡群と一連の遺跡としてとらえることができる。

8世紀になると、比恵遺跡群と間の台地を切り通して山陽道と水城をつなぐ古代官道が開かれる。この官道は9世紀初頭には機能しなくなり、11世紀中頃から14世紀頃まで再び利用されたことが確認されている(比恵遺跡群79次調査)。山王遺跡においても、3次調査で同時期の波板状压痕が検出されているだけでなく、全体的に12世紀代の柱穴や溝、井戸などが増える。6次・11次・13次調査付近では当該期の屋敷地が広がっていたと考えられ、墨書き陶磁器や中国錢だけでなく、博多遺跡群で確認されているカリウム鉛ガラス生産に関わるつぼなどが出土している。その後、14世紀になると、山王遺跡一帯は開拓され、農村化したと考えられる。戦国時代以降の文献にあらわれる遺跡の状況については、福岡市埋蔵文化財調査報告書第878集を参照されたい。

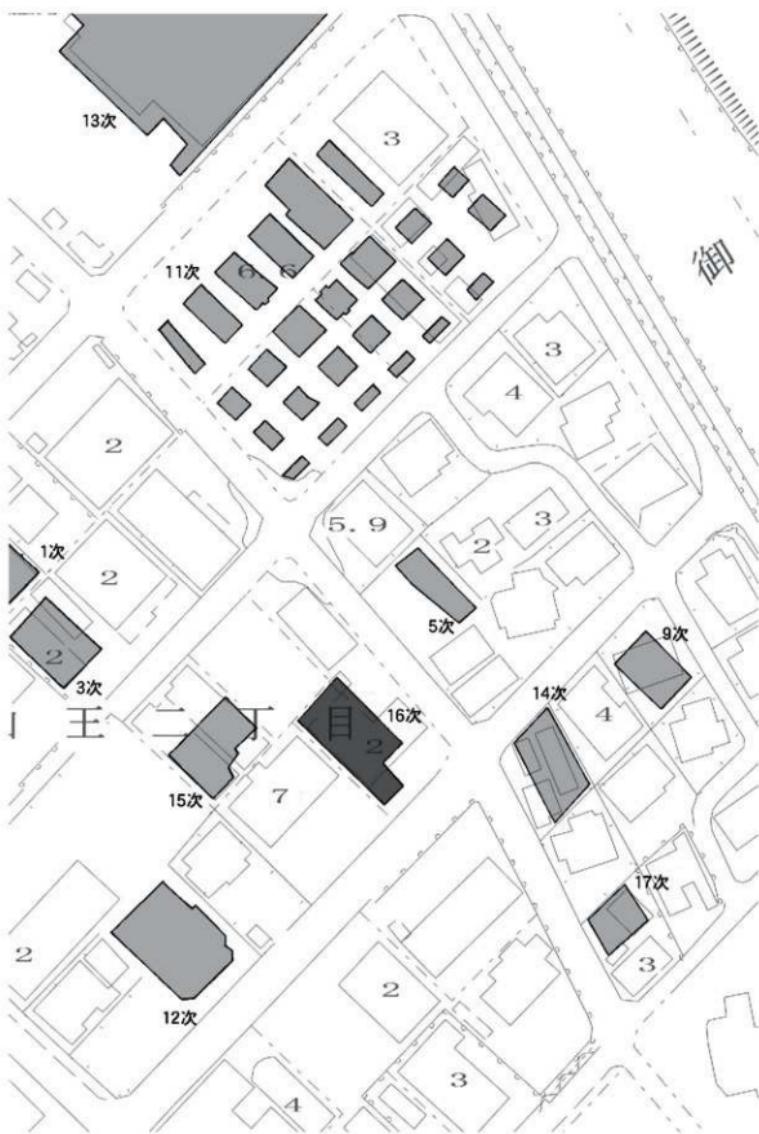


- | | | | | |
|-------------|-------------|--------------|-------------|-------------|
| 1. 山王遺跡 | 2. 比恵遺跡群 | 3. 那珂遺跡群 | 4. 東那珂遺跡 | 5. 五十川遺跡 |
| 6. 井尻 A 遺跡 | 7. 井尻 B 遺跡 | 8. 横手遺跡 | 9. 寺島遺跡 | 10. 笠塚遺跡 |
| 11. 井尻 C 遺跡 | 12. 須玖・岡本遺跡 | 13. 諸岡 A 遺跡 | 14. 諸岡 B 遺跡 | 15. 笹原遺跡 |
| 16. 三筑遺跡 | 17. 那珂君休遺跡 | 18. 板付遺跡 | 19. 高畠遺跡 | 20. 麦野 A 遺跡 |
| 21. 板付東遺跡 | 22. 雀居遺跡 | 23. 下月隈 D 遺跡 | | |

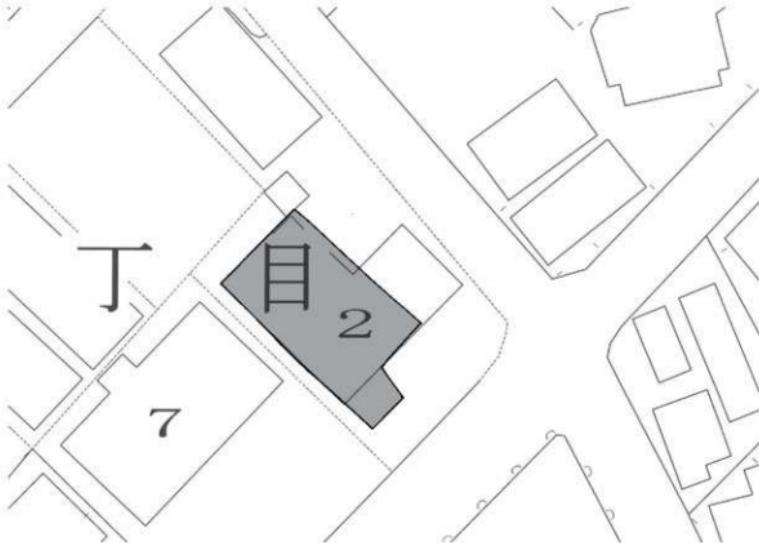
第1図 山王遺跡と周辺遺跡 (S = 1/25000)



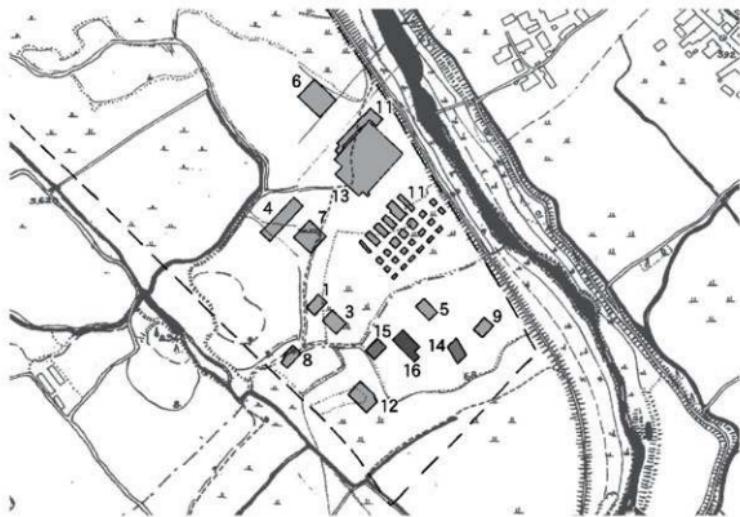
第2図 山王遺跡と周辺遺跡の調査地点位置図 ($S = 1/10000$)



第3図 調査区位置図 (S = 1/1000)



第4図 調査区位置図 ($S = 1/500$)



第5図 調査区位置図 ($S = 1/4000$ 昭和初期)

III 調査の記録

1. 調査の概要

第16次調査地点は山王遺跡の南端部にある。周辺で行われた5・14・15次調査では、弥生時代前期の貯蔵穴、弥生時代中期の溝・土坑、弥生時代後期初頭の住居跡・溝、弥生時代終末期から古墳時代初頭にかけての住居跡、古墳時代後期の住居跡・土坑、平安時代末から鎌倉時代の柱穴・溝・井戸などが検出されている。これらの遺構は、標高5.7m～6.5mの鳥栖ローム層上面で確認された。

調査は令和2年7月27日に開始した。排土を場内で処理する必要があったため、対象範囲を分割し、第5図のとおり1区・2区として調査を進めることとした。1区は7月28日から、2区は9月9日から調査に着手し、遺構面に至るまでの表土は重機により掘削・埋め戻しを行った。10月14日に器材の撤収を行い、調査を終了した。

調査前の現地表面は標高6.5m前後を測り、地表面から-45cmまでが現代盛土、-55cmまでが旧耕作土。その下に厚さ15cm程度の暗褐色の包含層が堆積しており、その直下にある鳥栖ローム上面(G.L.-70cm)で遺構を検出した(第6図)。遺構面の標高はおよそ5.8mで、南から北に向かって低くなる。

検出した遺構は、弥生時代から古墳時代にかけての竪穴住居・溝・土坑・柱穴、平安時代末頃の井戸・柱穴などである。調査区内は以前の建物によって大きく破壊されており、竪穴住居の遺存状況は悪く、いずれも遺構の隅や壁溝など部分的にしか確認できなかった。なお、弥生時代後期の井戸底から内行花文系の小形仿製鏡が出土した。

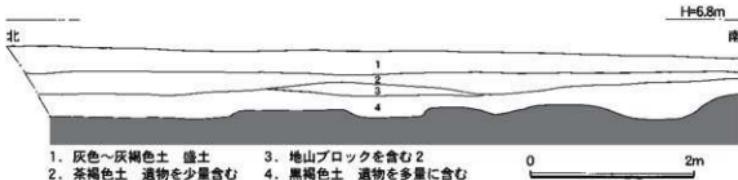
遺物は弥生土器、石器、青銅器、土師器、須恵器、陶磁器、鉄器等で、コンテナケース20箱分である。

2. 遺構と遺物

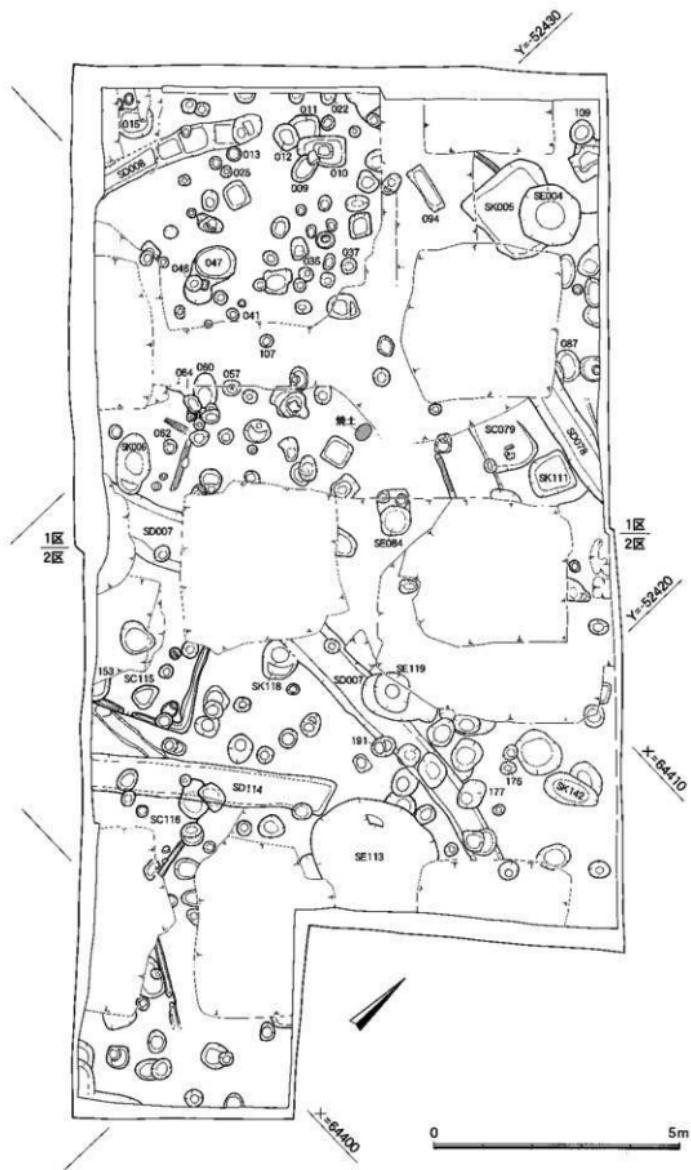
①住居 (SC)

SC079 (第8図)

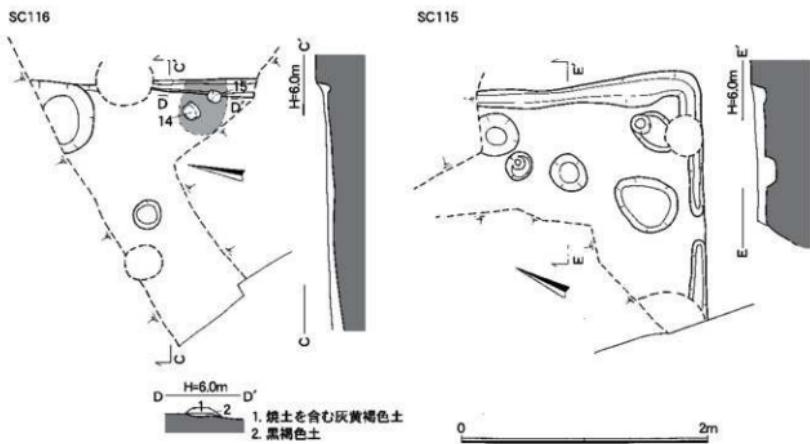
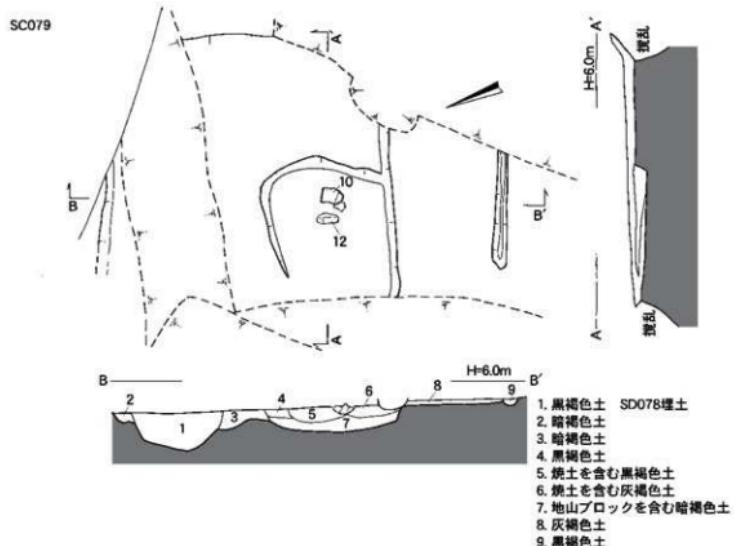
調査区中央部東側に位置する竪穴住居である。検出面の標高は最も高いところで5.9mを測る。遺存状況が悪く、検出した時点ですでに中央部の炉跡が確認された。住居北辺と南辺の壁溝の位置関係から、北西-南東方向に主軸をとる、方形プランの住居と推測される。北辺と南辺の壁溝との間は3.3mを測る。住居に伴う柱穴は検出することができなかった。壁溝の残存幅は約0.1m、深さは約0.05mである。壁溝や炉跡の土層堆積状況から、床面は灰褐色～暗褐色土で貼床されていたと考えられる。出土遺物から古墳時代中期以降に廃絶した住居と推測される。



第6図 1区東壁土層図 (S=1/60)



第7図 調査区全体図 ($S = 1/100$)



第8図 SC079・115・116実測図 (S = 1/40)

出土遺物（第9図）

1・2は土師器の鉢。1は口縁部の7割程度を欠損する。内外面ともに調整されているものの、粘土の接合部分がわかるほど粗雑なつくりである。外面底部から口縁部にかけて黒斑がある。にぶい黄橙色を呈し、胎土には白色粒をやや多く含む。2はほぼ完形。1と同様に胎土に白色粒をやや多く含む。黄橙色を呈し、焼成は良好である。3・4はミニチュアの鉢。胎土は1・2と共に通する。3はほぼ完形で、橙色を呈する。4は口縁部を一部欠損する。淡橙色を呈し、口縁部付近には小孔が穿たれている。5・6・7も土師器鉢。1・2に比べて胎土は精緻である。5・7は摩滅が著しく調整は観察できない。黄橙～橙色を呈する。6は外面は摩滅しているものの、内面には横方向のヘラミガキがみられる。8・9は土師器甕。8の内面にはケズリの痕跡が残っており、外面は工具でナデ調整される。9はとくに器壁が厚く器面も平滑ではなく、つくりは粗い。外面の胴部上半はハケ調整されるが、外底部はナデ。8・9ともに橙色を呈し焼成は良好。10は住居中央部の炉跡付近から出土した甕で、胴部から底部付近のみ残存する。外面はハケ調整、内面は摩滅しているが指オサエの痕跡が残る。胎土には白色粒を多く含む。11は弥生土器甕の底部である。内面にはケズリ、外面にはハケ調整がみられる。

12は炉跡から出土した台石。中央部に敲打によるくぼみが残っているほか、部分的に被熱痕がみられる。石材は花崗岩か。灰黄色を呈する。

SC115（第8図）

調査区中央部西側に位置する竪穴住居である。標高5.9m前後で検出した。遺存状況が悪く、住居の東隅のみしか確認できなかった。住居の北側は搅乱を受けて失われており、西側は調査区外へと続く。東隅に残っていた壁溝は、幅0.1～0.25m、深さ0.25m、長さ2m以上であることから、北西～南東方向に主軸をとる、一辺2m以上の方形プランの住居であったと推測される。埋土は黒褐色土。検出した柱穴はどれも浅く、住居に伴うものは不明である。出土遺物からは遺構の時期は判断できない。

出土遺物（第9図）

13は弥生時代中期の甕口縁部の破片である。摩滅が著しく調整は不明。橙色を呈し、焼成は良好である。

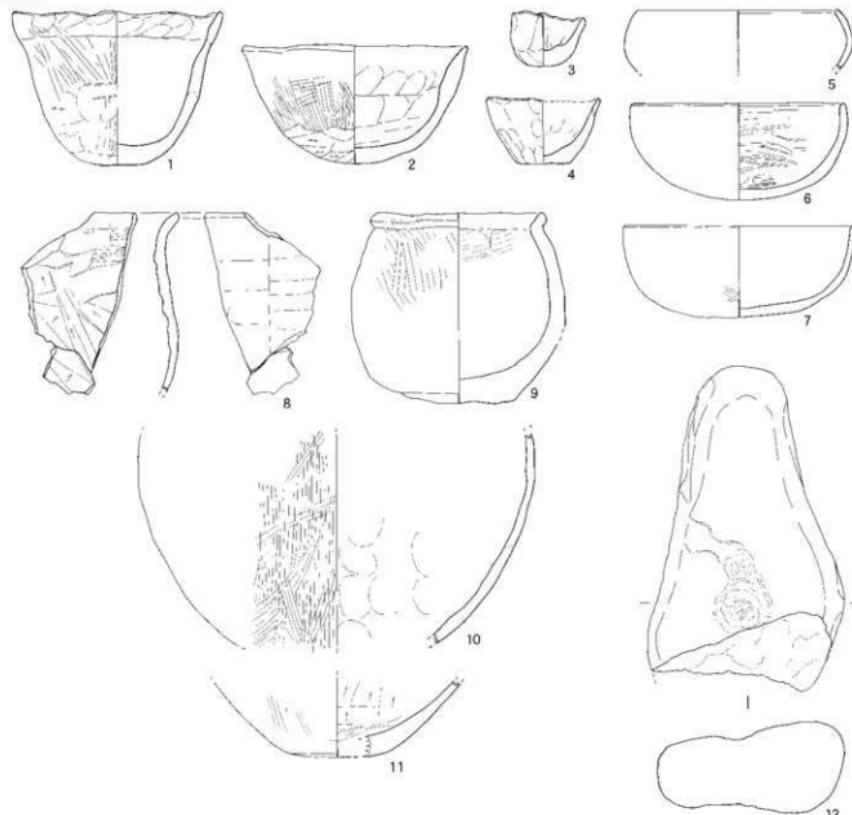
SC116（第8図）

SC115の南東に位置する竪穴住居である。検出面の標高は約5.9m。埋土は黒褐色土。深さ5～10cm程度で遺存状況が悪く、検出時点ですでに炉跡の痕跡が確認できた。住居東辺の壁溝から、一辺1.7m以上の方形の住居であることがわかる。壁溝は、残りのよいところで幅0.15m、深さ0.25m程度である。炉跡は東壁沿いにあり、炉の底面から第9図の15に示した土器が出土地した。住居全体の残りが悪いため、住居に伴う柱穴は把握できなかった。出土遺物から、古墳時代前期には廃絶した住居と考えられる。

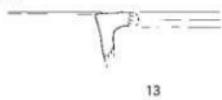
出土遺物（第9図）

14は浅黄橙色の土師器小型丸底壺である。口縁部を一部欠損する。摩滅が著しく、頸部付近にハケ調整がみられるほかは調整の詳細は不明。底部付近に黒斑がつく。15は土師器の鉢である。略完形だが摩滅が著しく、内面にわずかにハケ調整がみられる。橙色を呈する。14・15ともに胎土に白色粒を少量含む。

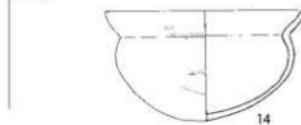
SC079



SC115



SC116



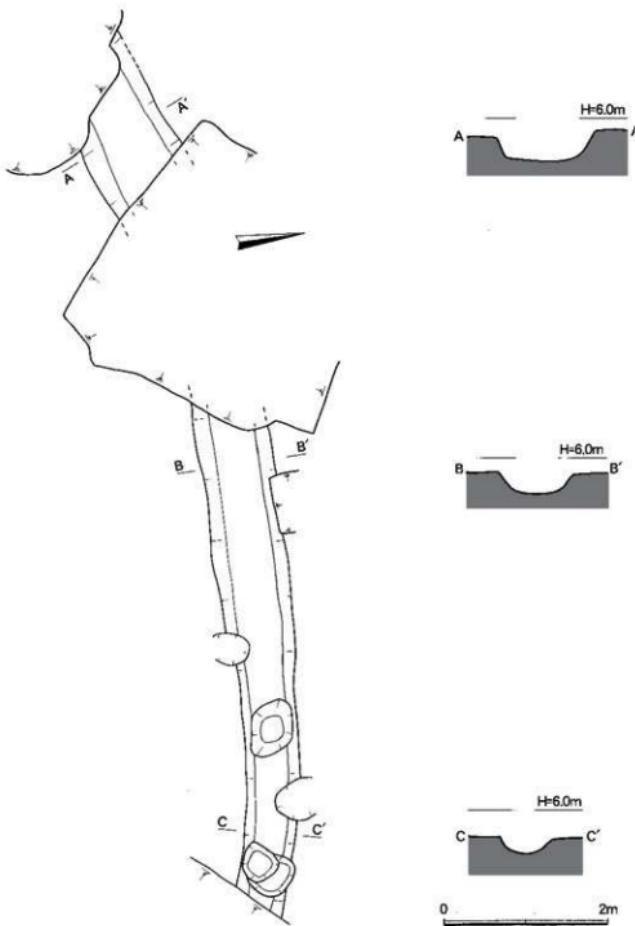
第9図 SC079・115・116出土遺物実測図 (S = 1/3)

②溝 (SD)

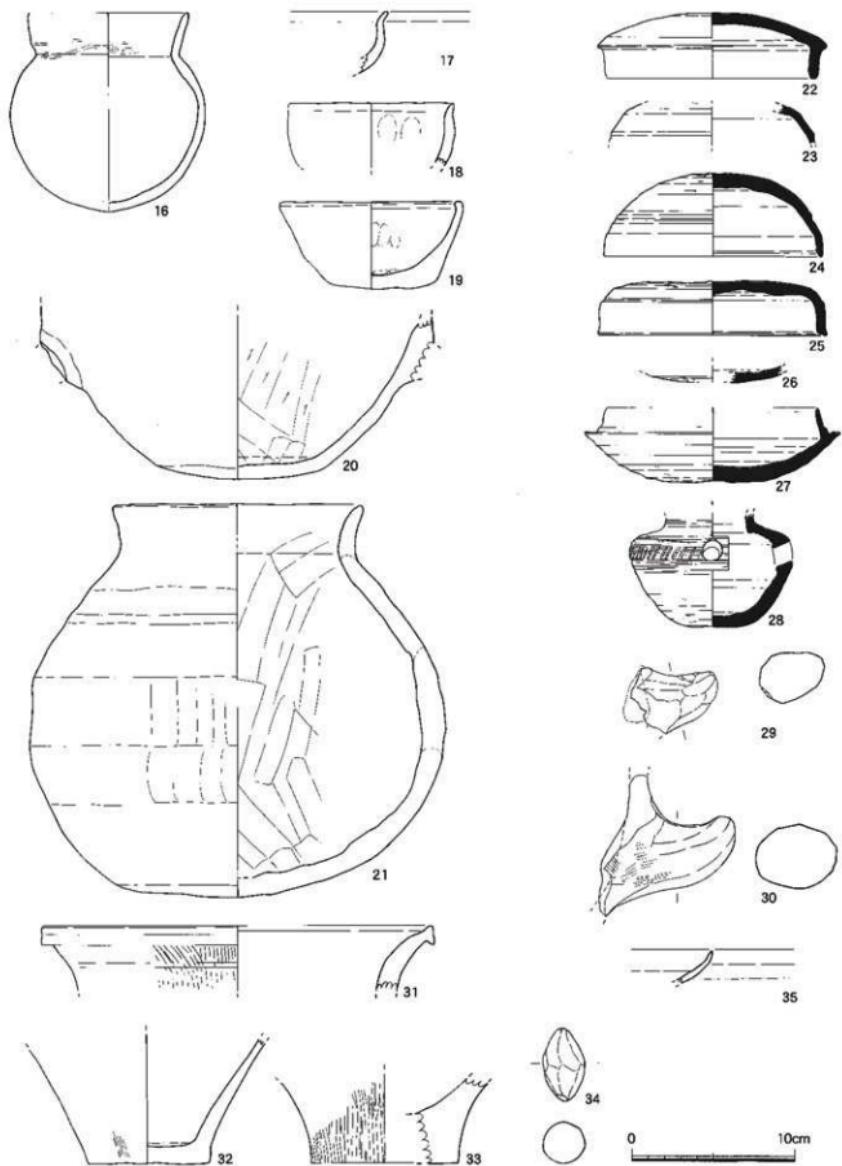
SD007 (第10図)

調査区中央部から南側で、長さ約10.8mにわたって検出した溝である。南側に中心をもつ円弧を描くように掘削されており、復元すると直径15.7m程度となる。溝の西側および東側は調査区外へと続く。大きく削平をうけており、溝の底部付近のみ確認できた。

検出面の標高は約5.7～5.8m、底面の標高は約5.5mで一定している。溝の幅は西側で広く1.2m、



第10図 SD007 実測図 (S = 1/60)



第11図 SD007出土遺物実測図 (S = 1/3)

東側で0.6mを検出し、同様に、溝底面の幅も西側で広く0.9m、東側で0.35mである。残存状況が悪いので溝の断面形の詳細は分からぬ。埋土は地山粒の混じる褐灰色を呈する。出土遺物から少なくとも古墳時代後期以前に機能していた溝と考えられる。

出土遺物（第11図）

16は土師器の壺。口縁部の一部と底部から体部を大きく欠損する。全体が摩滅しているが、頸部を中心へラ磨きの痕跡がみられる。橙色を呈し、焼成は良好。17・18・19は土師器の鉢。17は全体的に摩滅しており、調整は不明。18は橙色を呈し焼成は良好、ナデ調整で仕上げされている。19も橙色を呈し、全体的に摩滅が進んでいるが指オサエの後ナデ調整が観察できる。20は把手付きの鉢か。外面は摩滅が進んでいるが、内面にはヘラ削りの痕跡がみられる。底部付近に黒斑がつく。21は土師器壺。内外面に工具痕が残り、つくりは粗い。胎土に白色粒を多く含む。黄橙色を呈する。

22～25は須恵器壺蓋。22は、焼成が甘く橙色を呈する土師質のもの。摩滅が著しく調整は観察できない。壺身の可能性がある。23も焼成があまく、灰黄色を呈する。24・25は灰色を呈し焼成も良好。24は完形である。6世紀前半から中頃のもの。26・27は須恵器壺身。26は壺蓋の可能性もある。暗灰色～暗赤灰色を呈する。28は須恵器越。灰色を呈し、焼成も良好である。出土した須恵器22～28には時期幅がある。29・30は土師器把手。

31は弥生土器壺。浅黄橙色を呈する。内面ナデ、外縦方向のハケ調整がみられる。32・33は弥生土器壺底部。32は全体が摩滅しており調整はよくわからない。33は褐灰色を呈し、外面ハケ、内面ナデで仕上げられている。34は暗灰褐色を呈する投弾。重さ23gを測る。35は白磁皿か。浅黄色の釉薬が内外面にかかっている。

SD008（第12図）

調査区北西隅で、長さ約2.8mにわたって検出した溝である。主軸を北北東～南南西にとる。溝の北側は時期不明の柱穴に切られ、南側は調査区外へと続く。大きく削平を受けており、溝の底部付近のみ確認できた。検出面の標高は約5.5～5.6m、底面の標高は約5.3m前後を測る。底面は平坦ではなく、段差がつく。溝の幅は0.5～0.6mで、溝底面の幅は約0.3mである。出土遺物から構造の時期を判断するのは難しい。

出土遺物（第13図）

36・38は須恵器壺蓋、37は須恵器壺身。すべて破片で、暗灰色を呈する。37の内面には当て具の痕跡がみられる。39は磁器の高台片。外面に青みを帯びた白色の釉がかけられているが、疊付と高台内面は露胎。胎土は乳白色を呈する。混入か。40は土師器把手。

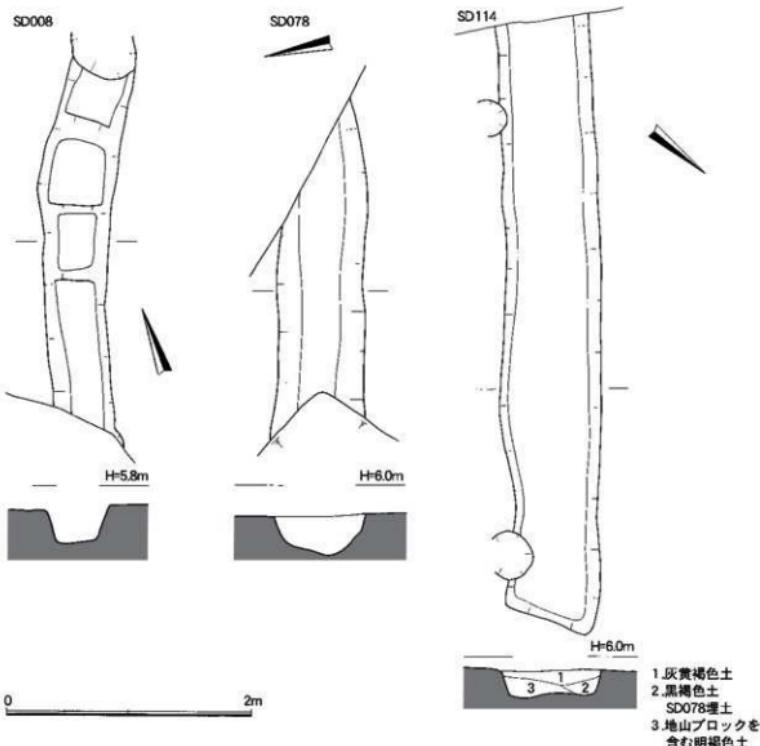
SD078（第12図）

調査区中央部東端で、長さ約2.6mにわたって検出した溝で、SC078を切る。主軸を略東西方向にとり、溝の東側は調査区外へと続き、西側は攪乱に切られる。大きく削平を受けており、溝の底部付近のみ確認できた。検出面の標高は約5.75m、底面の標高は深いところで約5.4mを測る。溝の幅は約0.75m。残存状況が悪いので溝の断面形の詳細は分からぬ。出土遺物から時期を判断するのは難しいが、古代の溝と思われる。

出土遺物（第13図）

41は須恵器横瓶の肩部片か。外面に平行タタキの痕跡とカキメがみられる。また、自然釉と坏の底部と思われる別固体の片も付着している。外面は青黒色、内面は灰色を呈し、焼成は良好である。

42・43は須恵器壺身。42の内面底部には円弧状の当て具痕のようなものがみられる。43は明灰色を呈し、焼成はあまい。44は黒色土器の破片。外面は淡い灰色～黒色を呈する。内面は黒化処理されている。



第12図 SD008・078・114 実測図 (S = 1/40)

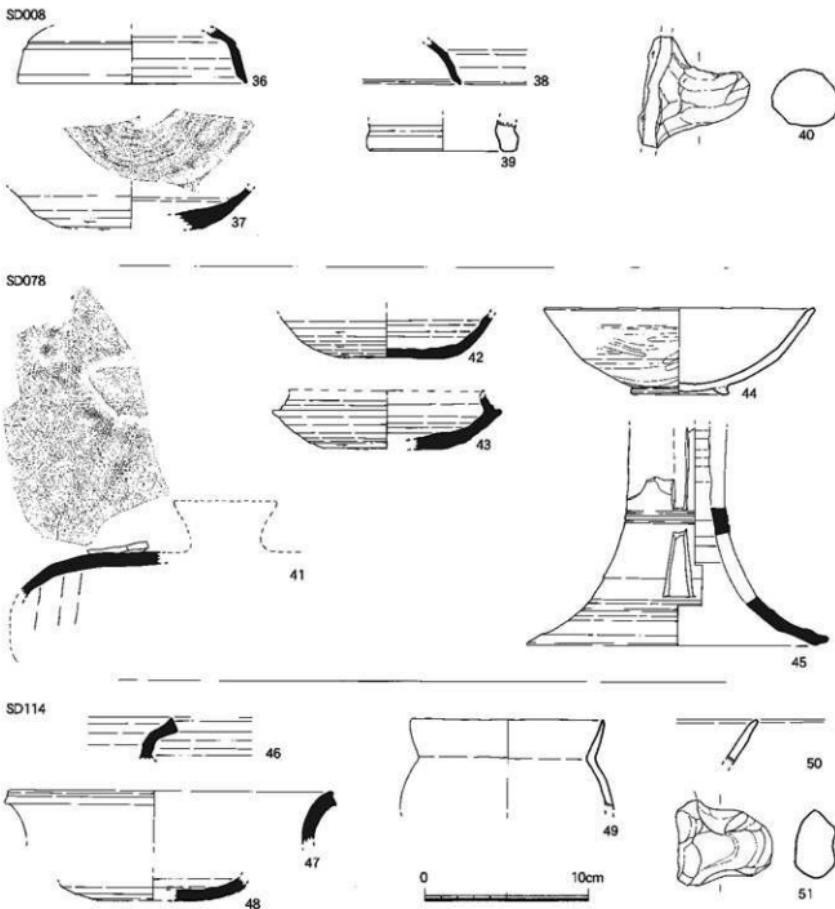
外面にミガキの痕跡はみられるが、内面は摩滅が進んでいる。45は須恵器高环脚台であるが、浅黄褐色を呈する土師質のもの。透かしは上下に3箇所はいる。

SD114(第12図)

調査区南部で、長さ約5mにわたって検出した溝である。主軸を北西—南東方向にとる。溝の南西側は調査区外へ続くが、溝の北東側は調査区内で終わる。大きく削平を受けており、溝の底部付近のみ確認できた。検出面の標高は約5.9m、底面の標高は約5.65mをはかる。溝の幅は約0.8m、溝底面の幅は約0.7m。埋土は、上層が灰黄褐色土で、下層が黒褐色土を主体とする。出土遺物はいずれも破片で、出土遺物から時期を判断するのは難しい。

出土遺物(第13図)

46・47は須恵器壺の口縁部。46は暗灰色、47は明灰色を呈し、ともに焼成は良好。48は須恵器環身。49は土師器壺。摩滅が著しく調整は観察できない。50は青磁碗の口縁部片。釉は灰色オリーブ色。51は土師器把手。

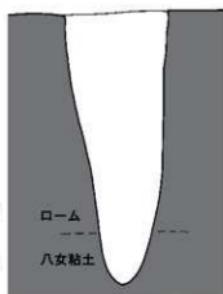
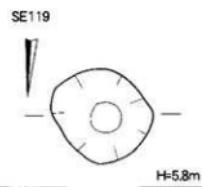
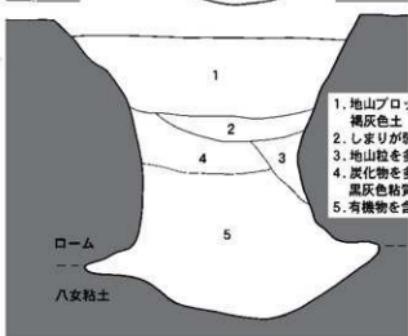
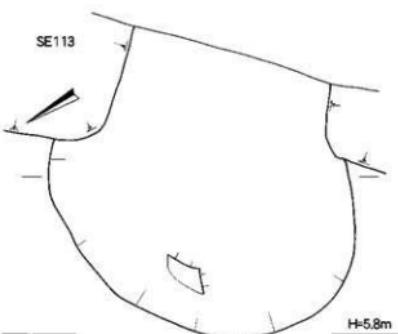
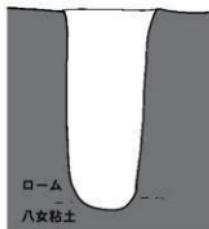
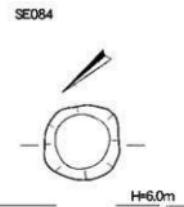
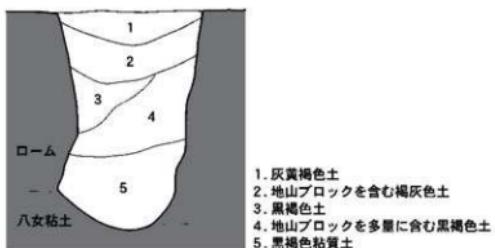
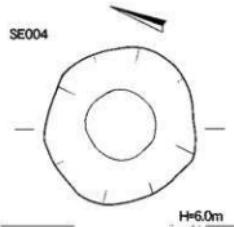


第13図 SD008・078・114出土遺物実測図 (S = 1/3)

③井戸 (SE)

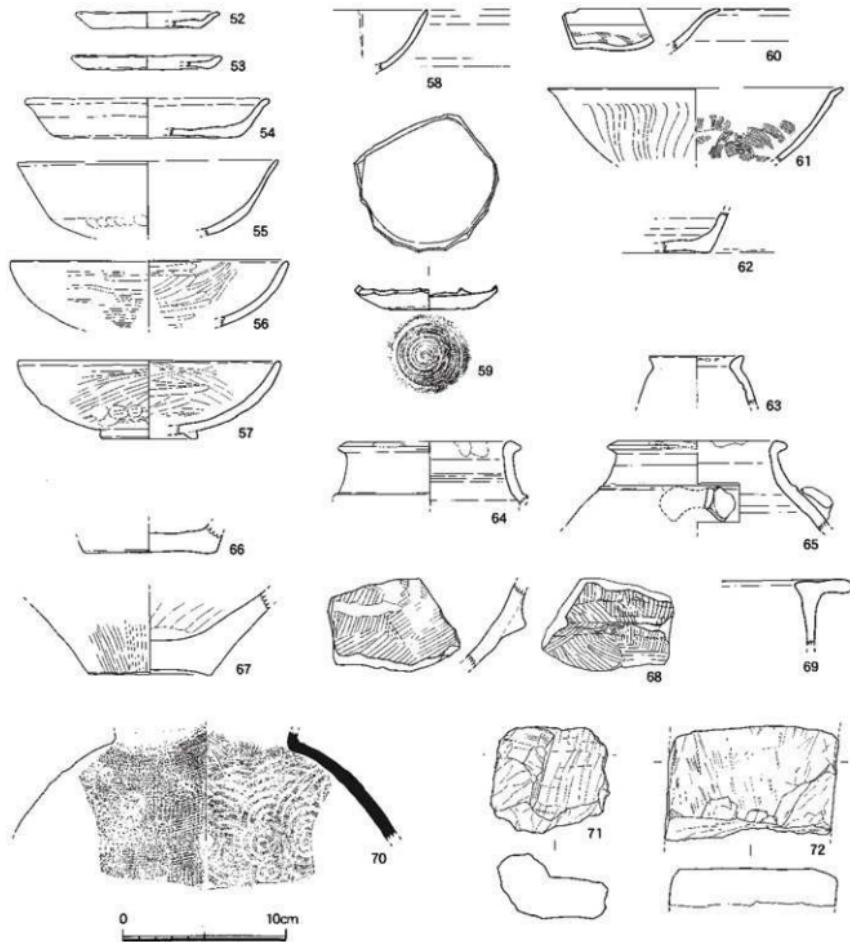
SE004 (第14図)

調査区北隅で検出した、平面円形の井戸である。直径は約1.2mで、八女粘土まで掘りこまれており、検出面から深さ約1.8mで底となる。検出面の標高は5.7m、底面の標高は3.9mを測る。埋土は、検出面から0.6m程度までは灰黄褐色～褐灰色を呈し、以下は黒褐色土を主体とする。標高5.0m付近で一時湧水した。底に近くほど粘性が高くなる。出土遺物から、12世紀前半代には廃絶していた井戸と考えられる。



0 2m

第 14 図 SE004・084・113・119 実測図 (S = 1/40)



第15図 SE004出土遺物実測図 ($S = 1/3$)

出土遺物（第15図）

52・53は土師器小皿の破片。**52**はヘラ切り、**53**は回転糸切りで底部が切り離されている。黄橙色を呈する。**54**は土師器壺の破片。底部には糸切りの痕跡がある。内底面は定方向のナデ調整。**55**は口縁が外に開く碗。瓦質だが、外面は灰黃褐色で内面は黒色を呈する。内黒の黒色土器か。**56・57**は瓦器甌の破片。灰色～黒灰色を呈する。器面は内外ともにヘラミガキで仕上げられており、**57**の外面部には指オサエの痕跡がみられる。**58**は白磁甌の破片。内面には輪花の一部とみられる刻み目と

白堆線が残る。釉薬は灰黄色だが摩滅して光沢が失われている。59は白磁皿の底部。意図的に打ち欠かれており、瓦玉として再利用されたものか。外底部は露胎で回転糸切りの痕跡が観察できる。釉薬は透明で細かい貫入がはいる。60・61も白磁碗片。ともに釉薬は内外面にかけられ、胎土は灰色を呈し黒色粒を含む。60は内面に櫛目文、61は内面に櫛目文、外面に工具による花弁文が施される。62は白磁壺底部片。外底部は露胎。内面は無釉。外側の釉は灰黄色を呈する。胎土は黒色粒を含む灰白色。63は陶器壺。外面に褐釉がかけられ、口縁部内面に砂目が残る。胎土は黒色粒を含む灰色。64・65は陶器壺。64の釉薬は灰黄色、65の釉薬は黄白色で、ともに口縁部に目跡が残る。65には四箇所に耳がつくと思われる。64の胎土は褐色粒・白色粒を含む明褐色、65の胎土は黒色・白色粒を含むやや暗い灰色である。

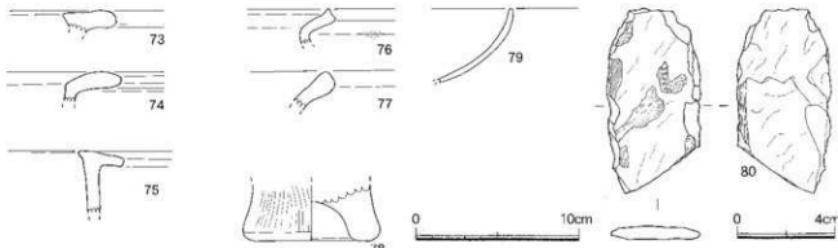
66・67は弥生土器底部。66は内外面ナデ調整で仕上げられ、橙色を呈する。67の外面には黒斑がつく。にぶい黄橙色を呈する。68は弥生土器甕の胴部片。胴部下半に断面三角形の突帯がつく。浅黄色を呈し、焼成は良好である。69は弥生土器甕の口縁部片。橙色を呈し、全面ナデ調整で仕上げられている。70は須恵器甕の肩部片。外面青灰色、内面暗灰色を呈し、焼成は良好である。外面にはタタキの後に施されたカキメが明瞭に観察できる。71は滑石製石鍋の耳の部分を切断し、断面L字形になるように再加工したもの。用途は不明。重量は208gを測る。72は暗灰色を呈する石材でつくられた砥石。SE084(第14図)

調査区中央部で検出した、平面円形の井戸である。直径は約0.6mで、鳥栖ロームから八女粘土へ変化するあたりまで掘り込まれており、検出面から深さ約1.75mで底となる。検出面の標高は5.8m、底面の標高は4.1mを測る。埋土は黒褐色土を主体とする。底部付近では粘性が高く、地山ブロックを含む。出土遺物から時期を特定するのは難しいが、埋土等からSE119と同じく弥生時代の井戸である可能性が高い。

出土遺物(第16図)

73～75は弥生土器甕の口縁部片である。73は横ナデ、74はナデ、75は横ナデで仕上げられている。73・75は橙色、74は灰白色を呈する。76・77も弥生土器甕の口縁部片。ともににぶい橙色を呈する。76の外面はハケ調整の後にナデ調整されている。78は弥生土器甕の上げ底状の底部片である。外面にはハケ調整、外底部にはナデ調整がみられる。79は弥生土器の鉢。橙色を呈し、全体をナデ調整している。

80は磨製石器の破片。器種は不明。横方向にレイアウトするべきものかもしれない。灰黒色を呈する石材を用いている。



第16図 SE084出土遺物実測図 (S = 1/2・1/3)

SE113（第14図）

調査区南東端で検出した、平面不整円形の井戸である。南端は調査区外へと続き、一部攪乱に切られる。直径は2.4～2.7mで、八女粘土まで掘り込まれており、検出面から深さ約2.5mで底となる。検出面の標高は5.7m、底面の標高は3.2mを測る。埋土は、検出面から0.8m程度まではしまりの強い炭化物を含む褐灰色土で、以下は黒褐色土を主体とする。底面に近づくほど粘性が高くなつた。出土遺物から12世紀前半頃には廃絶した井戸と考えられる。

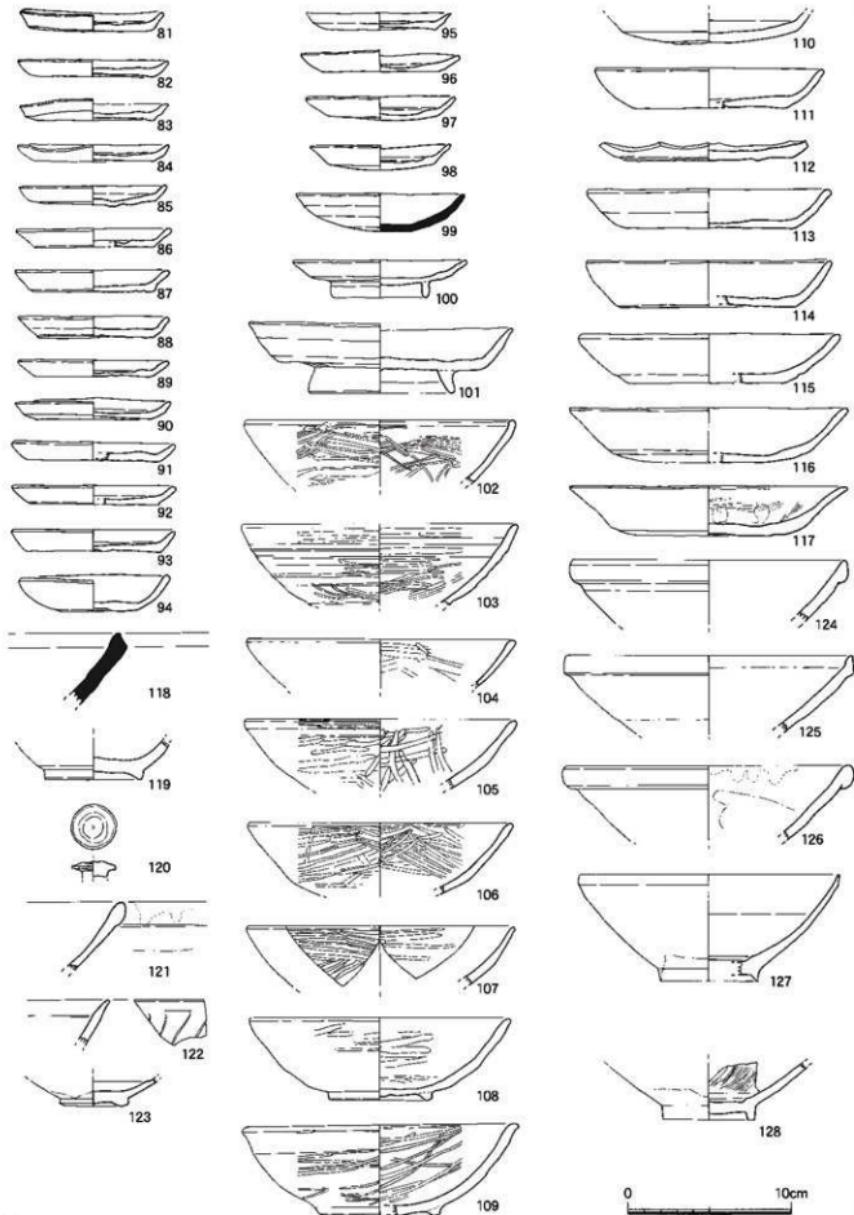
出土遺物（第17・18図）

81～98は土師器小皿。81～94はすべて底部を回転糸切りで切り離している。うち、86・91・94以外には板状圧痕も観察できる。96～98はヘラ切りにより底部を切り離すもの。97には板状圧痕もみられる。81は略完形で橙色を呈する。82は摩滅が進んでいるが内底面には定方向のナデがみられる。残存率1/2。浅黄橙色を呈する。83は略完形。浅黄橙色。84・85は口縁部一部欠損。84は灰黄褐色、85はにぶい黄橙色を呈する。85は内外面ともに斑状に黒化した部分がある。86・87はともに残存率1/2程度。86の内底部は回転ナデ後に定方向ナデで仕上げている。86はにぶい黄橙色、87は明黄橙色を呈する。88は口縁部を一部欠損する。浅黄橙色を呈する。89は残存率1/3程度。灰白色を呈する。90は略完形で、浅黄橙色。92は残存率1/3程度で、灰白色を呈する。88・89・90・91・92の内面底部は、回転横ナデ後に定方向ナデで仕上げられている。91は残存率1/4程度の破片で、灰黄褐色を呈する。93は残存率1/2程度。浅黄橙色を呈する。内面は摩滅しており調整を観察できない。94は灰白色を呈し須恵器。全面回転ナデで調整される。95は残存率1/2程度。浅黄橙色を呈する。全体に摩滅しており調整は観察できない。96は完形。外面は回転ナデ、内面の調整は摩滅が及んでおり不明。浅黄橙色を呈する。97は残存率2/3程度。にぶい橙色を呈する。内面底部は定方向ナデ。98は略完全形。淡橙色を呈する。内底面は定方向ナデ。

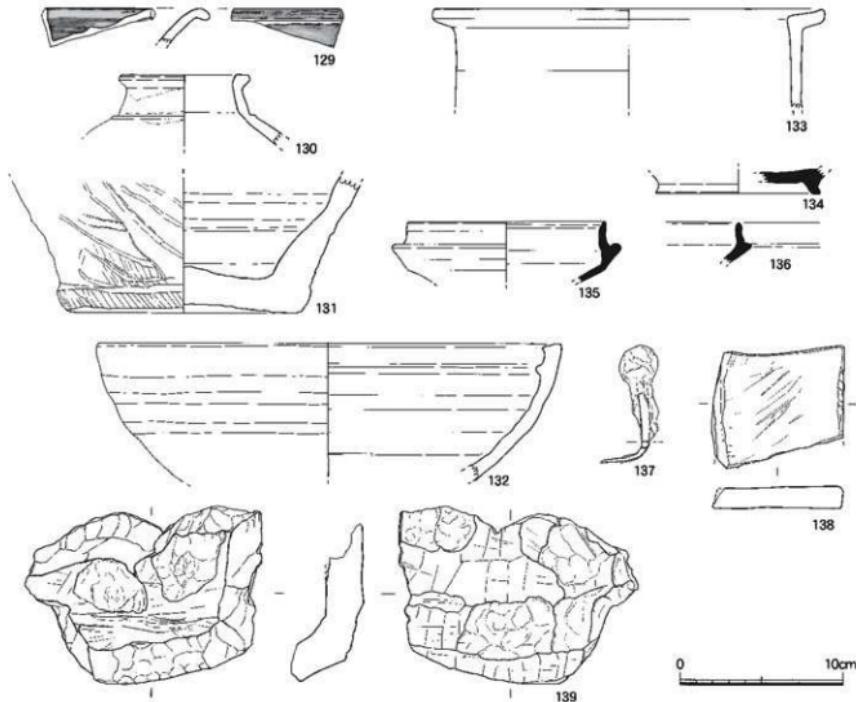
99は灰色を呈する須恵器環。内外底面はナデ調整で仕上げられている。100は橙色を呈する高台付きの土師器小皿。残存率は1/2以下。内部底面は定方向ナデ、底部はヘラ切りで切り離され板状圧痕がみられる。101は高台付きの土師器皿。にぶい黄色を呈する。底部の切り離し方法は不明だが、板状圧痕は観察できる。内面底部は回転ナデの後に定方向ナデで仕上げている。高台の貼り付け方が粗雑である。

102～109は土師質から瓦質の碗。内外面はほぼヘラミガキで調整されている。102は灰黄褐色を呈する土師質の破片。103も残存率1/2以下の灰白色を呈する土師器碗。外面には回転調整による凹凸が残る。104も残存率1/2以下。内黒の黒色土器か。内面は黒色で外面はにぶい黄橙色。105は瓦器碗の破片。口縁部外面は横方向のヘラミガキが観察できる。内面黒色、外面灰白色から黒色を呈する。106も瓦器碗の破片。内外面ともに黒色を呈する。107は土師質の破片で、赤褐色から暗赤褐色を呈する。108は瓦器碗の破片。黒色から暗灰色を呈する。外面のヘラミガキは不明瞭。109も内面黒色、外面淡灰色から黒色の瓦器碗。丁寧な器面調整を施す。

110～117は土師器環。111・117以外は、すべて回転糸切りにより底部を切り離しており、うち115以外は板状圧痕がみられる。110は残存率1/2程度。浅黄橙色を呈する。内底部は回転ナデ後に定方向ナデ仕上げ。111は浅黄橙色を呈する破片。全体的に摩滅しており、底部の切り離し方法も不明であるが、内面底部には定方向ナデが観察できる。112は环部を打ち欠いて瓦玉状に加工されている。にぶい橙色～浅黄橙色を呈する。113は残存率1/2程度。にぶい黄橙色を呈する。112・113ともに内面底部には定方向ナデ調整がみられる。114は残存率1/3程度。灰色白を呈する。内面は摩滅しており調整は観察できない。115は残存率1/3程度、にぶい黄橙色を呈する。全体的に摩滅しているが、



第17図 SE113出土遺物実測図① (S = 1/3)



第18図 SE113出土遺物実測図② (S = 1/3)

内面底部に定方向のナデが観察される。116は残存率1/3程度。灰白色を呈する。内面底部は回転ナデの後、板状工具による定方向のナデで仕上げている。117は残存率1/2以下の瓦質のもので坏部がやや外反する。外面は灰白色、内面は灰黄褐色を呈する。外面底部のみ黒色。内面に指オサエと工具の痕跡が残るが、坏部の外面には回転ナデがみられる。底部は板状圧痕がみられるが、切り離しの方法は不明。

118は須恵器鉢の口縁部片で、灰色を呈する。119は陶器碗の底部片。胎土は白色粒・黒色粒を少量含む灰色を呈する。内面に灰オリーブ色に発色した釉薬が斑状にかかっているが、内底部は釉薬を搔き取って露胎となっている。外面は無釉。120は白磁の蓋。外面のみかけられた釉薬は黄色味を帯びた白色。胎土は灰白色を呈する。121は白磁碗の口縁部片である。胎土は黒色細粒を含む灰白色で、釉薬は内面から外面の口縁部まで施されている。122も白磁碗の口縁部片。外面にはヘラによる花弁文が描かれている。釉薬が全面にかかり、全体が灰白色を呈する。123は白磁碗の底部片。外底部は露胎。釉薬は水色を帯びた白色に発色しており、胎土は黒色粒子を含んだ白色を呈する。124～127は白磁碗の口縁部破片。124の釉はやや黄色味を帯びた白色で、胎土は黒色粒子を少量含む。125の釉は乳白色で、外面底部は露胎。胎土は灰色で黒色粒子を含む。126の口縁部内面には釉垂れができる

ているが、内面体部以下および外面底部付近以下は露胎である。釉は淡い灰色を帯びた白色で、胎土には黒色粒子が含まれている。**127**は外面底部以外の全面に釉薬が施され、黄色味を帯びた白色を呈する。**128**は灰白色を呈する白磁碗の底部片。内面には櫛描文が描かれ、外面底部以外に釉が施されている。

129～132は陶器。**129**は盤の口縁部破片か。胎土は白色粒を含む。黄味を帯びた透明の釉薬をかけている。**130**は壺の口縁部片。胎土は橙色を呈し褐色を含む。釉薬を内面から外面口縁部付近にかけており、白色から灰オリーブ色を呈する。**131**は褐釉陶器の壺の底部片。胎土は白色粒を多く含み、褐色を呈する。外底部以外に釉薬を施している。外面には粗いハケ調整の上にタタキのような痕跡がみられる。内面底部と外面底部の一部に砂が付着している。**132**は淡い小豆色を呈する捏ね鉢の破片。胎土には白色粒をやや多く含む。

133は壺の口縁部破片。橙色を呈し、胎土には白色粒をやや多く含む。内外面はナデ調整で仕上げられている。**134**は高台付きの須恵器碗。暗灰色を呈し、焼成は良好。**135・136**は須恵器壺の破片。**135**は褐灰色、**136**は暗赤褐色を呈する。

137は鉄釘か。**138**は砂岩とおもわれる石材でつくられた砥石。**139**は石鍋の底部付近を利用した再加工品か。用途は不明。

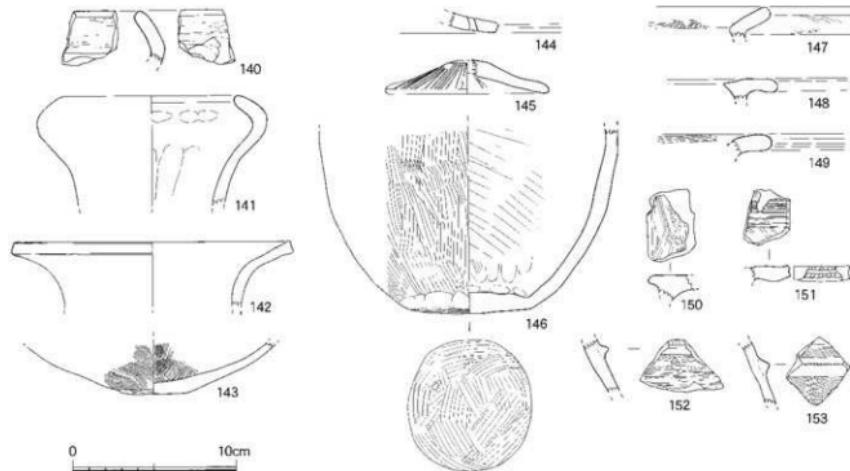
SE119（第14図）

2区中央付近で検出した、平面不整円形の井戸である。直径は0.75～0.9mで、八女粘土まで掘り込まれており、底面では湧水した。検出面から深さ約2.1mで底となる。検出面の標高は5.6m、底面の標高は3.5mをはかる。埋土は黒褐色土を主体とする。下層では砂粒を多く含み、最下層では地山ブロックが混じり粘性が強い。底面付近で、内行花文系の小形仿製鏡が出土した。出土遺物から弥生時代後期中頃～後半に埋没した井戸と考えられる。

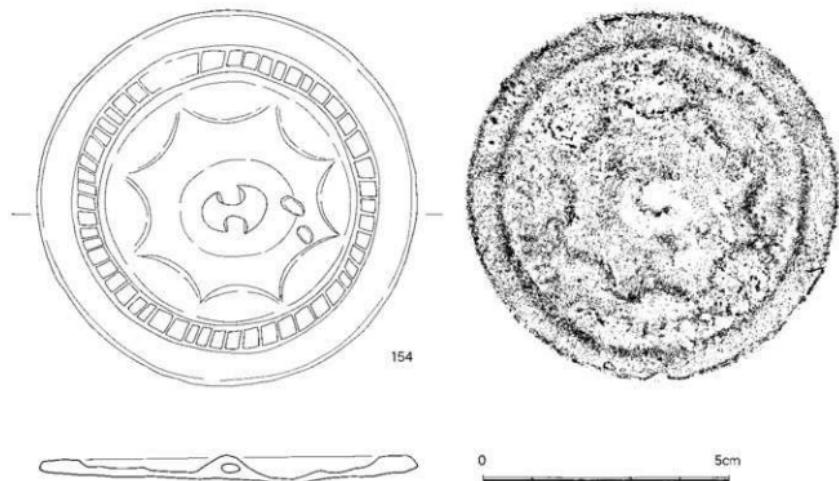
出土遺物（第19・20図）

140・141は弥生土器の袋状口縁壺片。ともに丹塗りされている。**140**は摩滅がすんでいるが横方向の研磨痕跡がみられる。**141**は全体に摩滅しており調整の詳細は不明。**142**は弥生土器広口壺の口縁部片。にぶい橙色を呈し、全体的に横ナデで調整されている。**143**は弥生土器壺の底部片。灰黄褐色を呈し、内外面にハケ調整がみられる。**144・145**は弥生土器の蓋。**144**は孔が穿たれた小片。にぶい黄橙色を呈する。**145**の外表面は丹塗りされており、縦方向に磨かれている。内面は板状工具によるナデ仕上げ。**146**は弥生土器の壺。底部は凸レンズ状をなし、外底部までハケ調整されている。底部から胴部へは膨らみ気味に立ち上がる。内面は工具によるナデ仕上げ。外面底部付近には黒斑がつく。浅黄褐色を呈し、胎土には白色粒を多く含む。**147～151**は弥生土器壺の口縁部片。**147～149**は胎土に白色粒を含み、黄褐色からにぶい黄橙色を呈する。**147・149**は内外面の一部にハケ調整がみられる。**150・151**は胎土に白色粒を含むものの、丹塗りされており、鋤先口縁の上面はヘラミガキで仕上げられている。**152・153**は弥生土器壺の胴部片。ともに外面には断面三角形の突帯が貼り付けられ、丹塗りされている。

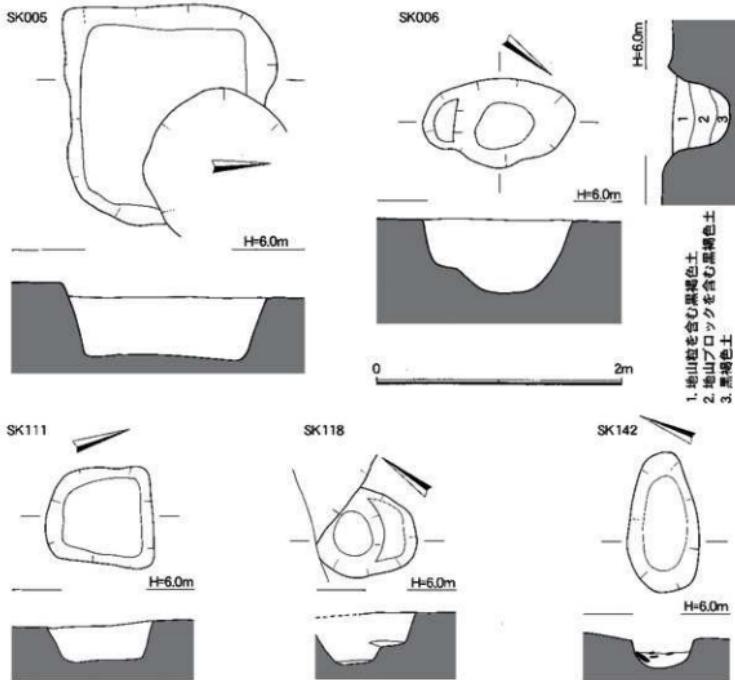
154は井戸の底部付近で出土した内行花文系の小形仿製鏡である。直径7.7cmを測り、鉢の部分の厚さは最大0.45cm。平線の幅は0.8cm前後で、厚さは0.25～0.3cm。鉢孔は0.2cmで繊維の付着がみられる。櫛葉文は不鮮明な部分が多い。詳細については、田尻義了先生に玉稿を賜った。附編を参照されたい。



第19図 SE119出土遺物実測図 ($S = 1/3$)



第20図 SE119出土銅鏡実測図 ($S = 1/1$)



第21図 SK005・006・111・118・142 実測図 (S = 1/40)

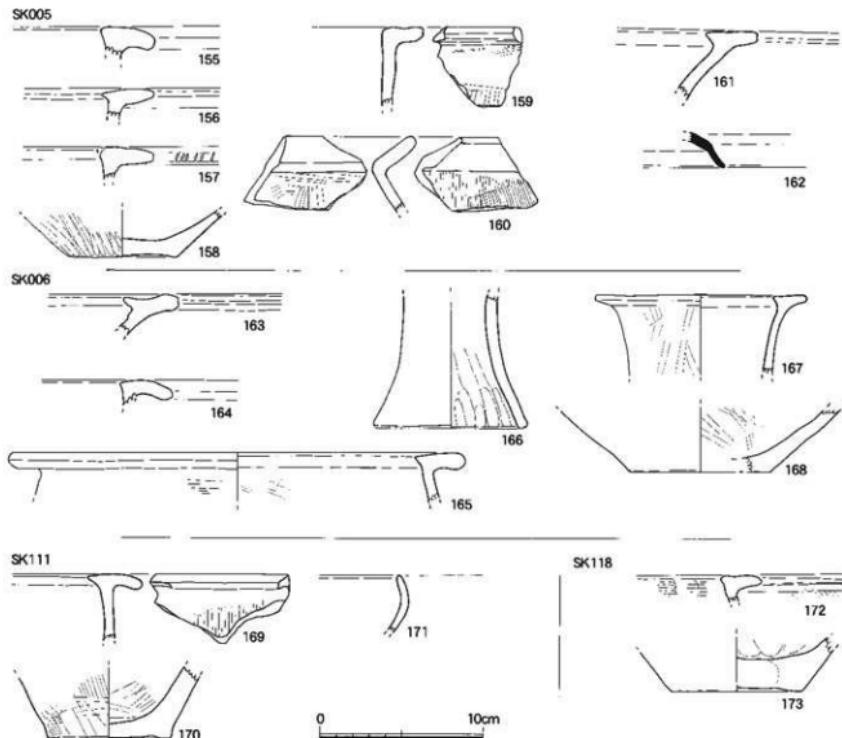
④土坑 (SK)

SK005 (第21図)

調査区北隅で検出した、平面方形の土坑である。SE004に切られる。南北1.7m、東西1.8mを測る。標高5.75mで検出し、検出面から深さ約0.65mで底となる。埋土は地山ブロックを多量に含むしまりの強い黒褐色土である。出土遺物から時期の詳細を判断するのは難しいが、弥生時代の土坑である可能性が高い。

出土遺物 (第22図)

155～157は弥生土器甕の口縁部である。155・157は橙色、156はにぶい黄橙色を呈する。156のみ摩滅しており調整が確認できないが、155・157は横ナデで仕上げている。158は弥生土器壺の底部片。丹塗りされていないが、外面はヘラミガキされている。159・160も弥生土器甕の口縁部片。159は外面に黒斑がつく。内面はナデ、外面はハケ調整後横ナデで仕上げられている。160は内外面ともにハケ調整と横ナデが観察できる。161は弥生土器の高坏か。全体に摩滅が及んでおり調整は確認できないが、丹塗りされていたようである。162は須恵器の坏蓋。暗灰色を呈し焼成は良好である。



第22図 SK005・006・111・118出土遺物実測図 (S = 1/3)

SK006 (第21図)

調査区西部で検出した、北西—南東方向に長軸をもつ平面橢円形の土坑である。南東側に段を有するため、もっとも深い部分の底面形は円形である。長軸1.25m、短軸0.7mを測る。標高5.8mで検出し、検出面から深さ約0.35mで中段部、約0.6mで底面となる。埋土は地山ブロックを含む黒褐色土である。底面近くの土は地山ブロックを含まない。出土遺物から時期の詳細を判断するのは難しいが、弥生時代に機能した土坑である可能性が高い。

出土遺物 (第22図)

163は弥生土器高壺の口縁部片である。全体的に灰白色を呈し、摩滅が著しく調整は不明。**164**は弥生土器甕の口縁部片。摩滅が全体に及んでおり、調整を確認することができない。にぶい橙色を呈する。**165**も弥生土器甕の口縁部片。にぶい橙色を呈し、内外面ともにハケ調整の痕跡がみられる。**166**は弥生土器台の破片。外面は橙色で全体的に摩滅しているが、裾部にはナデ調整が観察できる。内面は指オサエと指によるナデ。**167**は弥生土器壺の口縁部片。全体的に摩滅しており、調整は外面にわずかにハケ調整の痕跡がみられる程度である。灰黄褐色を呈する。**168**は弥生土器壺の底部片。内面に工具によるナデの痕跡が残り、外面は摩滅により調整が確認できない。

SK111（第21図）

調査区東部で検出した、平面不整方形の土坑である。南北0.9m、東西0.8mを測る。標高5.7mで検出し、検出面から深さ約0.3mで底となる。出土遺物から時期を判断するのは難しいが、弥生時代に機能していた土坑である可能性が高い。

出土遺物（第22図）

169は弥生土器甕の口縁部片。外面ハケ調整、内面はナデ調整、口縁部周辺は横ナデで仕上げられている。にぶい黄橙色を呈し、胎土には白色粒がやや多く含まれる。170は弥生土器甕の底部片。外面は橙色でハケ調整、内面は褐色で工具によりナデ調整される。171は橙色を呈する弥生土器鉢の口縁部片。全体的に摩滅しており、口縁部とした部分が破面の可能性もある。

SK118（第21図）

調査区中央部で検出した、北西-南東方向に長軸をもつ平面楕円形の土坑である。北側をSD007に切られる。南東側に段を有する。長軸0.85m以上、短軸0.7mを測る。標高5.85mで検出し、検出面から深さ約0.3mで段、約0.4mで底となる。出土遺物から時期を判断するのは難しいが、弥生時代に機能していた土坑である可能性が高い。

出土遺物（第22図）

172は弥生土器甕の口縁部片。外面はハケ調整後に横ナデ、内面も横方向のハケ調整後に横ナデで仕上げられている。173は弥生土器甕の底部片。外面ナデ、内面には指オサエの痕跡が観察できる。にぶい黄橙色を呈する。

SK142（第21図）

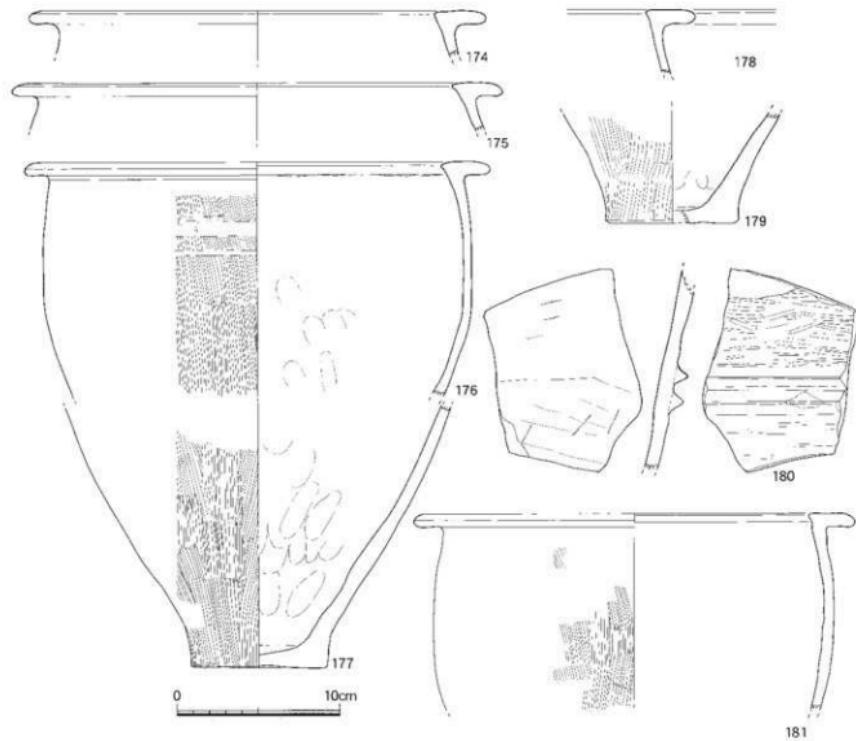
調査区東隅で検出した、北東-南西方向に長軸をもつ平面楕円形の土坑である。長軸1.15m、短軸0.6mを測る。標高5.8mで検出し、検出面から深さ約0.25mで底となる。出土遺物から弥生時代中期には廃絶した土坑であると考えられる。

出土遺物（第23図）

174～181はすべて弥生土器甕である。174・175は口縁部片。174はにぶい橙色を呈し、内面は摩滅しているが、口縁部から外面にかけては横ナデ調整が観察できる。175は浅黄橙色で、全体に摩滅が及んでおり調整の詳細は不明である。176は口縁部から胴部上半までの破片。にぶい黄橙色を呈し、内面はナデ、外面はハケ調整で、外面の胴部上半付近のみその上から横ナデ調整されている。口縁部周辺は横ナデで仕上げる。177は底部から胴部下半付近の破片。橙色を呈する。外面はハケ調整、内面は指によるナデ調整の痕跡が多数みられる。178は口縁部片。にぶい黄橙色で全体的に摩滅しており、調整は観察できない。179は底部片。内底面と外側底部付近に黒斑がつく。外面は丹塗りされていたようである。180は甕の胴部片。外面は断面三角形の突帯が二条貼り付けられており、丹塗りされ横方向に磨かれている。内面は工具によるナデ調整がみられる。181は口縁部から胴部上半にかけての破片。全体的に摩滅しているが、外面はハケ調整、内面はナデ調整で仕上げられている。にぶい橙色を呈する。

⑤その他の出土遺物（第24・25・26図）

182～189はSP009～012上部から出土した。時期幅があり、おむね古墳時代に位置付けられる。182・183は須恵器の环身片。182は暗灰色、183は灰色を呈し、焼成は良好である。184は弥生土器甕の口縁部片。外面はハケ調整後横ナデ、内面は指によるナデの痕跡がのこる。185は土師器甕の口縁部片。淡黄色で内外面ともに横ナデ調整されている。186は土師器小型丸底壺。残存率1/2以下。橙色で、全体に摩滅がよどんでおり調整は観察できない。187は土師器甕口縁部片。淡灰褐色を呈し、



第23図 SK142出土遺物実測図 (S = 1/3)

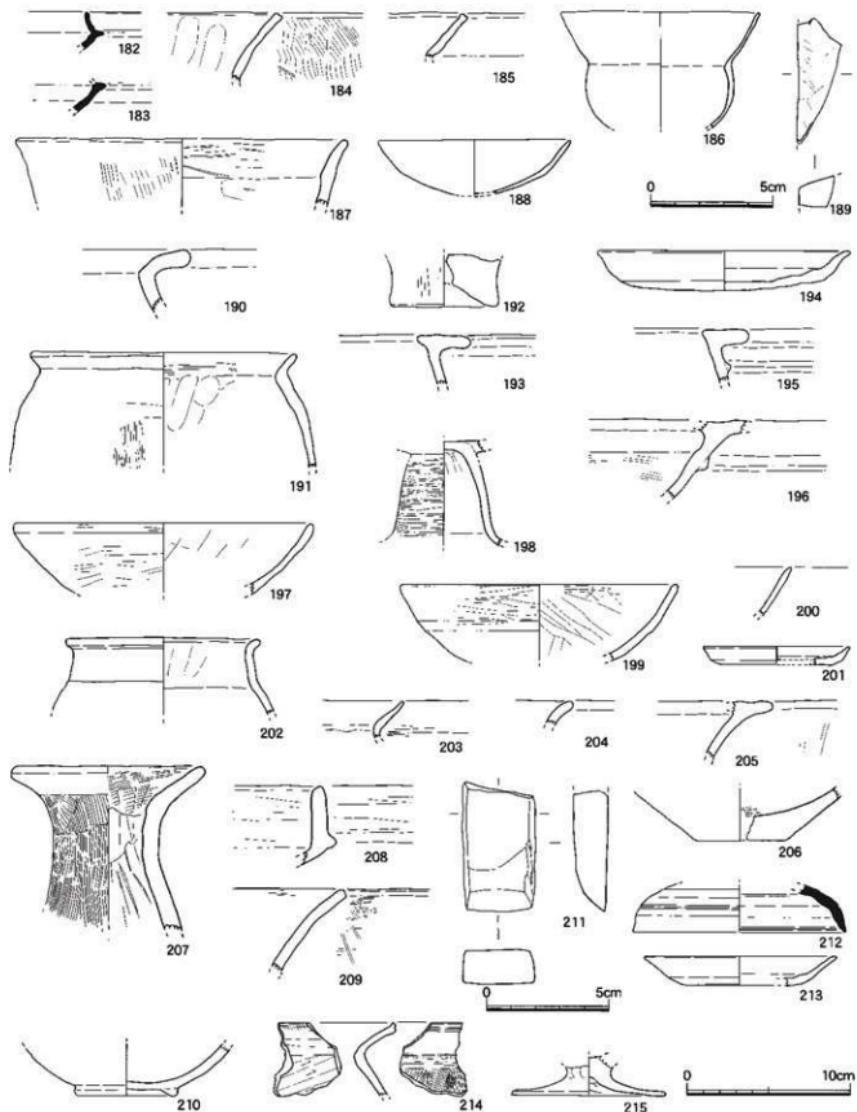
胎土には砂粒を多く含む。外面はハケ調整後に横ナデ、内面は横方向のハケ調整と下部はケズリ。

188は土師器鉢の破片。摩滅がすんでおり調整は不明瞭。淡赤色を呈する。189は暗灰色の石材を用いた砥石。

190・191はSP010から出土した。弥生時代後期前半に位置付けられる。190は弥生土器甕の口縁部片。灰橙色を呈し、胴部に近い部分に横方向の工具によるナデの痕跡がみられる。191は弥生土器甕の口縁部から胴部の破片。全体的に摩滅しているが、外面は縦方向のハケ調整後、横方向の工具によるナデ調整、内面には指オサエの痕跡がみられる。淡灰色を呈する。

192・193はSP011から出土した弥生土器である。192は上げ底の甕底部片。胎土には白色粒を多く含む。外面に縦方向のハケ調整が観察できる。193は甕の口縁部片。摩滅が全体に及んでおり、外面の一部に縦方向のハケ調整の痕跡がみられる。灰赤色を呈する。弥生時代中期初頭から前半に位置付けられる。

194はSP013から出土した土師器坏。淡橙色を呈し、底部は回転ヘラ切りで切り離され、板状圧痕がみられる。内面底部は定方向のナデ調整で仕上げている。11世紀～12世紀頃のものか。



第24図 その他の出土遺物実測図① (S = 1/2・1/3)

195・196 は SP015 から出土した弥生土器。**195** は甕の口縁部片。全体的に摩滅しており調整は不明。**196** は高坏の口縁部片。摩滅がすんでいるが内面は横ナデでハケ調整の痕跡が残る。ともに赤褐色を呈する。弥生時代中期に位置付けられる。

197 は SP022 から出土した淡黄色の土師器碗の破片である。外面は粗い横方向のミガキ、内面には工具の痕跡が観察できる。**198** は SP025 から出土した土師器高坏の脚部片である。外面には横方向のミガキが観察できる。脚部と坏部の内面は摩滅しており調整が観察できない。古墳時代初頭に位置付けられる。

199～201 は SP035 から出土した。**199** は瓦器碗の破片。口縁部内外面は暗灰色を呈する。外面半には横方向のヘラミガキ、内面にもミガキの痕跡がみられる。**200** は白磁碗の破片。**201** は土師器小皿。底部は回転ヘラ切りで切り離され、板状圧痕も残る。11世紀～12世紀頃に位置付けられる。

202 は SP037 から出土した弥生土器壺の口縁部片。残存率 1/5 以下。口径の大きさが団よりも小さい可能性がある。淡黄褐色で、摩滅が著しく調整の詳細は不明である。

203 は SP041 から出土した土師器甕の口縁部片。赤橙色で、内面に粘土の接合痕跡がみられる。古墳時代初頭から前期のものか。**204** は SP046 から出土した弥生土器甕の口縁部片。弥生時代前期のものか。

205・206 は SP047 から出土した弥生土器である。**205** は壺または高坏の口縁部片。摩滅が著しいが外面の一部に縦方向のミガキの痕跡がみられる。**206** は壺の底部片。全体に摩滅が進んでおり、内面底部付近にハケ調整の痕跡が残るのみである。弥生時代中期のものか。

207 は SP057 から出土した弥生土器の器台である。外面は縦方向のハケ調整後に口縁部付近を横ナデ調整している。内面は工具による縦方向のナデの後、口縁部付近は横方向のハケ調整で仕上げている。赤褐色を呈し、胎土には白色粒がやや多く含まれる。弥生時代後期に位置付けられる。

208・209 は SP060 から出土した古墳時代の土師器である。**208** は壺の口縁部片。明灰褐色を呈し、内外面ともに工具によりナデ調整される。**209** は高坏の口縁部片か。摩滅が著しいが、外面に一部ハケ調整後に磨いて仕上げた痕跡がみられる。

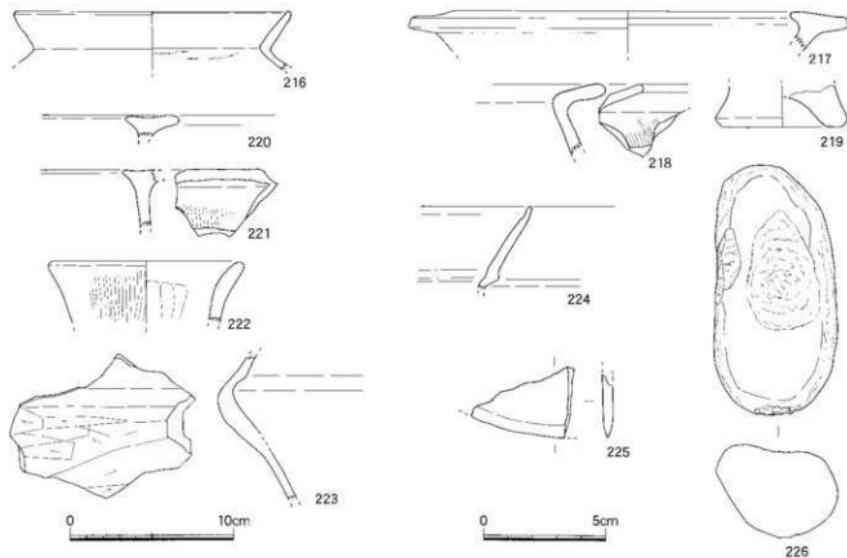
210 は SP062 から出土した瓦器碗の破片。摩滅しており調整は不明である。灰黒色から灰黄白色を呈する。

211～213 は SP064 から出土した。**211** は弥生時代の扁平片刃石斧。**212** は須恵器环蓋。焼成があまくにぶい黄橙色を呈する。**213** は土師器坏。摩滅が著しく底部の切り離し方法も含めて調整は観察できない。

214 は SP087 から出土した古墳時代の土師器甕の口縁部片である。にぶい黄橙色で、胸部内面はヘラ削り、胴部外面はハケ調整、口縁部内外面は横ナデ調整される。**215** は SP094 から出土した古墳時代の高坏の脚部片である。橙色で摩滅しており、調整は観察することができない。**216** は SP107 から出土した古墳時代の土師器甕の口縁部片である。口縁部は横ナデ、内外面ナデ調整される。内面の頸部付近に工具の痕跡が残る。胎土には白色粒を含む。

217～219 は SP109 から出土した弥生土器である。**217** は高坏の口縁部片。橙色で、摩滅が著しく調整の詳細は不明である。**218** は弥生土器甕の口縁部片。内面ナデ、外面ハケ、口縁部横ナデで調整されている。胎土に白色粒を含む。**219** は甕の底部片である。内面はナデ調整されるが、外面上は摩滅が進んでおり調整は観察できない。胎土には白色粒が多く含まれる。

220～223 は SP153 から出土した弥生土器である。**220・221** は甕の口縁部片。ともに摩滅が進んでおり、橙色からにぶい橙色を呈する。**221** の外面にはハケ調整の痕跡がのこる。**222** は器台の口縁



第25図 その他の出土遺物実測図② ($S = 1/2 \cdot 1/3$)

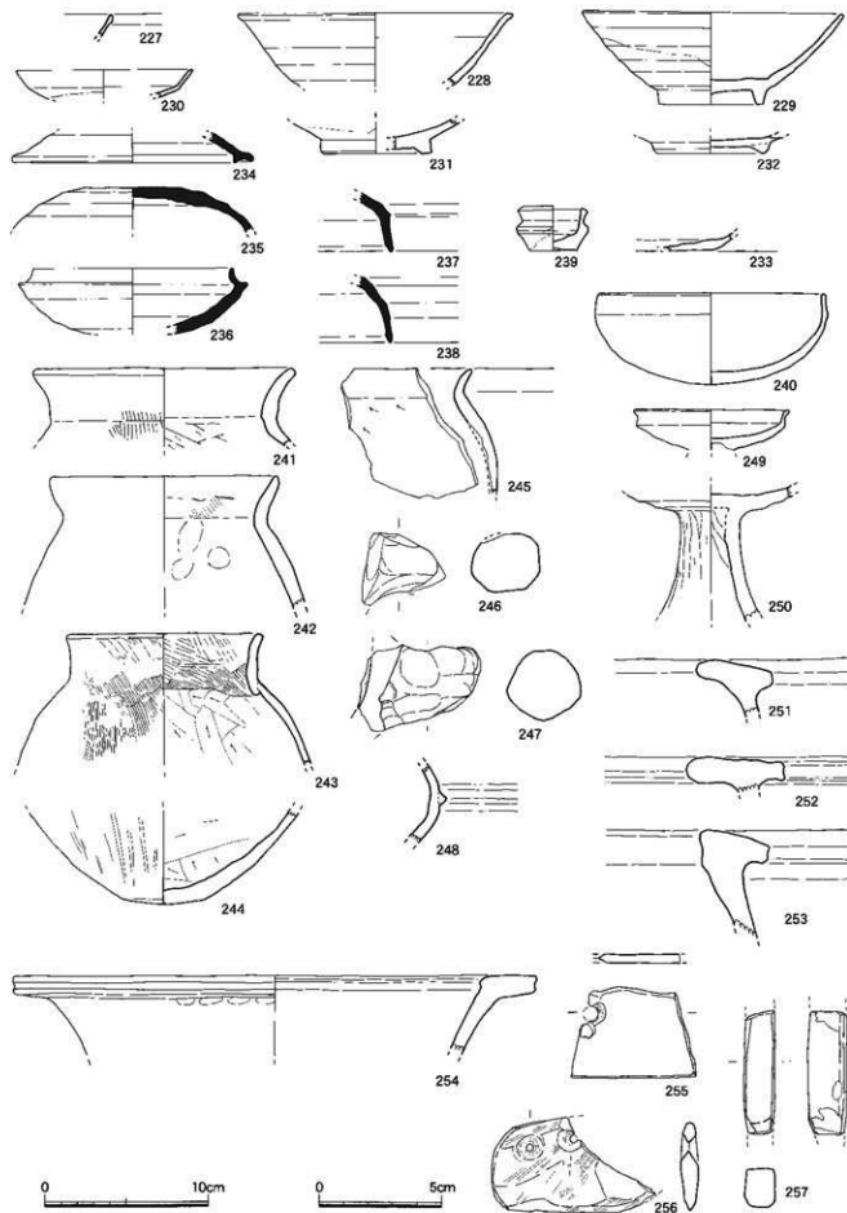
部片。外面には縦方向のハケで、内面は指ナデで調整される。橙色で胎土に白色粒を含む。223は土師器甕の頸部から胴部にかけての破片である。黄橙色で胎土には白色粒が多く含まれる。口縁部付近は横ナデ調整、体部内面はヘラ削り。外面はナデ調整で仕上げている。

224はSP176から出土した山陰系の二重口縁壺の口縁部片である。灰白色から淡黄色で、胎土は白色がやや多く含まれている。摩滅が著しく調整は観察できない。225はSP177から出土した石庖丁の破片。226はSP191から出土した敲石。重量は310g。端部に敲打痕があり、中央部にも敲打による凹みがある。

227～257は調査区北西側を中心に堆積していた黒色の包含層から出土した。

227～231は白磁碗。227は口縁部片。釉は黄色味のある透明なもので薄くかけられている。228も口縁部片で残存率は1/4程度。釉は白濁しており貫入が全体におよぶ。胎土は淡黄色を呈する。内面には沈線がめぐる。229も残存率1/2以下。灰色味のある透明度の低い釉薬をかけており、外面体部下半は露胎、内面底部は輪状に釉を搔き取っている。胎土は灰白色を呈する。230は底部を欠く皿の破片。灰緑色の透明度の低い釉をかけており、全体に貫入が広がる。外面の底部付近は露胎である。231は碗の底部片。黄色味のある白色の釉をうすく施している。底部外面は露胎。胎土はやや黄灰をおびる白色。

232は土師器碗の底部片。残存率は1/4程度。全体に摩滅が著しく調整は観察できない。淡橙色を呈する。233は土師器環の破片。摩滅が全体に及んでおり調整は不明。底部に板状圧痕がみられるものの、底部の切り離し方法は不明である。



第26図 その他の出土遺物実測図③ (S = 1/2 • 1/3)

234～238 は古墳時代の須恵器。5世紀末から7世紀前半まで時期幅がある。**234・235・237・238** は坏蓋。**234** は灰色、**235** は青灰色を呈する。**235** は天井部外面はヘラ削りされている。**237・238** は小片。**237** は灰色、**238** は暗灰色を呈する。**236** は坏身。灰白色で焼成は甘い。

239 は白磁の小壺。黄色味のある白濁釉を内外面にほどこし、外面胴部下半は露胎。

240～250 は弥生時代から古墳時代の弥生土器・土師器。**240** は土師器碗。にぶい黄褐色で、全体に摩滅が進んでおり調整は確認できない。胎土には白色粒が少量含まれる。**241～243・245** は土師器甕の口縁部から胴部上半の破片。胎土には白色粒が含まれる。**241** はにぶい黄橙色で、口縁部は横ナデ、胴部内面はヘラ削り、胴部外面は継方向のハケで調整される。**242** はにぶい黄褐色で、口縁部はハケ調整の後に横ナデ、胴部内外面はナデ調整で仕上げられている。口縁部内面には粘土紐の接合痕跡がのこる。**243** は外面継ハケ調整後に口縁部横ナデ、内面は胴部はヘラ削り、口縁部はハケ調整後横ナデで調整されている。橙色を呈する。**245** は内外面ともに摩滅が著しく調整は不明瞭だが、胴部の内面はヘラ削りされている。黄橙色を呈する。**244** は凸状をなす弥生土器甕の底部片。灰橙色で全体に摩滅が及んでいるが、外面は粗いハケ調整、内面はケズリの痕跡が観察できる。**246・247** は土師器甕または瓶の把手。**246** は浅黄橙色で、**247** は黄褐色。**247** は部分的に黒斑がつく。**248** は断面三角形の凸帯が貼り付けられた弥生土器壺の胴部片。摩滅が著しく、外面の一部にミガキの痕跡が残る。灰褐色を呈する。**249** は土師器高坏または器台の坏部。摩滅が進んでいるが、内面の一部にミガキの痕跡が観察できる。橙色で、胎土は精良である。**250** は土師器高坏の脚部片。脚部外面は継方向に削られており、脚部内面には絞り痕跡がみられる。坏部内面は摩滅しており調整は観察できない。橙褐色を呈し、胎土は精良である。

251～253 は弥生土器甕の口縁部片である。**251** は赤褐色、**252・253** は橙色、3点とも摩滅が著しく調整の詳細は不明。**254** は弥生土器壺の口縁部片。灰白色で、内面はナデ、外面は工具によるナデで調整されている。

255 は灰白色的石材を用いた石庖丁。風化が著しい。**256** も淡灰色の石材を用いた石庖丁。**257** は柱状片刃石斧。灰白色的石材を用いている。

IV おわりに

今回の調査では、弥生時代から古墳時代の竪穴住居・溝・土坑・井戸、平安時代末頃の井戸・柱穴等を検出した。調査区内は以前の建物基礎による搅乱が多いものの、残された部分からは比較的高密度に遺構が確認された。しかしながら遺構の遺存状況は悪く、竪穴住居はいずれもコーナーや壁溝など部分的にしか確認できず、溝も底面付近しか残っていなかった。本来は竪穴住居がさらに存在したものと思われる。一方、井戸はいずれも遺構面から2m程度残っており、多くの資料を得ることができた。特に弥生時代後期のSE119底から出土した小形仿製鏡は井戸の祭祀に伴うものと思われ、注目される。

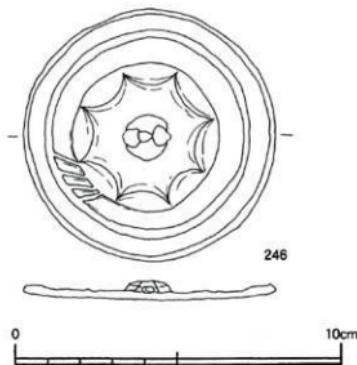
中世前半の井戸(SE004・SE113)も検出ましたが、東側の第14次地点では同時期の遺構は検出されていない。西側の第15次地点では同時期の井戸が確認されており、中世の集落の広がりを把握することができた。

附編 山王遺跡第16次調査出土の小形仿製鏡について (九州大学 田尻義了)

本資料（第20図154）はSE119より出土した弥生時代後期に鋳造された小形仿製鏡である。現在の面径は7.7cmをはかり、文様構成は外側より縁一時計回りの櫛歯文・円圏・内行花文（浮彫8花文）・円圏・鉢であり内行花文系小形仿製鏡第2型b類に相当する。本資料の特徴は、文様の一部が不鮮明になっており、その箇所が鉢孔の方向と一致している。他の小形仿製鏡でも認められるこの様相は、湯口方向を示していると想定できる。これまで出土している小形仿製鏡の鋳型で、湯口と鉢孔が彫り込まれ位置関係が判明している資料（須玖坂遺跡出土鋳型、ヒルハタ遺跡出土鋳型、井尻B遺跡出土）は、いずれも鉢孔の延長線上に湯口が設置されている。したがって、湯口を上にして鋳型を設置した場合、湯口に近い箇所の圧力が小さいため文様が不鮮明になり、湯口から離れた箇所の文様が鮮明に鉄出されると考えられるからである。本資料もこれまで出土している小形仿製鏡と同様にそうした特徴が認められることから、同じような鋳型で製作された資料と判断できる。

次に本資料の類例について述べる。内行花文系小形仿製鏡第2型b類で面径7.7cm前後、8花文の鏡のうち、資料に類似しているのは熊本県菊池市に所在する小野崎遺跡から出土した小形仿製鏡である（第27図）。小野崎遺跡からは8面の小形仿製鏡が出土しているが、そのうち報告書で246とされる鏡に本資料は極めて近い。面径は7.6cmであり、文様構成は外側から縁一時計回りの櫛歯文・円圏・内行花文（浮彫8花文）・鉢である。鉢の周りの円圏が報告書では図化記載されていないが、表面がかなり錯で覆われており、本来は存在するのかもしれない。鉢孔方向と内行花文の配置位置も極めて類似しており、同范関係に近い鏡である可能性がある。今後、両者の鏡を詳細に検討する必要がある。

最後に、山王遺跡周辺の遺跡から出土した小形仿製鏡と本資料の比較である。山王遺跡周辺の近隣遺跡のうち、これまで小形仿製鏡が確認されているのは比恵遺跡第91次調査の現代攢乱孔より出土した資料である。比恵遺跡第91次調査出土鏡は内行花文帯が弧線で表現されていることから、山王遺跡出土の本資料より若干後続する段階の資料である。御笠川と那珂川にはさまれた洪積台地上では、その他に少し南に離れるが井尻B遺跡第17次調査より内行花文鏡系小形仿製鏡第2型a類が1面出土している。井尻B遺跡第17次調査出土鏡とあわせてみると、内行花文系小形仿製鏡を一定期間入手し続けていた様相が復元できる。



第27図
小野崎遺跡出土鏡（高見淳編 2006より）

【第27図出典】

高見淳編 2006『小野崎遺跡』菊池市文化財調査報告第1集



1. 調査前状況（北から）



2. 1区東壁土層（南西から）



3. SC079 中央部遺物出土状況（西から）

図版 2



1. SC079 完掘状況（西から）



2. SC115 床面検出状況（西から）



3. SC116 遺物出土状況（西から）



1. SC116 完掘状況（西から）



2. SD007 土層（1区西から）



3. SD007 完掘状況（2区西から）

図版 4



1. SD008 (南から)



2. SD078 (西から)



3. SD114 土層 (東から)



1. SD114 (南西から)



2. SE004 挖削中 (西から)



3. SE004 断ち割り (西から)

図版 6



1. SE084 挖削中（北西から）



2. SE084 断ち割り（北西から）



3. SK005 土層（東から）



1. SK005 完掘状況（東から）



2. SK006 土層（北西から）



3. SK111 土層（東から）

図版 8



1. SK111 完掘状況（東から）



2. SK142 遺物出土状況（南西から）



3. 調査終了後状況（東から）

報告書抄録

山王遺跡 13

—第 16 次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1471 集

2023 年（令和 5 年）3 月 23 日

発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神 1 丁目 8 番 1 号

TEL (092) 711-4667

印刷 株式会社 陽文社

福岡市博多区那珂 5-7-37

TEL (092) 412-7331
